
TIME

後藤 能巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TIME

【Nコード】

N3831W

【作者名】

後藤 能巳

【あらすじ】

歩道で拾った携帯電話。それは”時を止める”装置だった。中学生の橘和人がその携帯電話を使って巻き起こすエピソードの数々。中学生から高校生、大学生へと成長し友情や恋を育んでいく。そして大学生のある日、ついに携帯電話の謎が明らかに…。サッカー、友情、携帯電話、そして恋。まじめで前向きな橘和人の長編、SF、青春、ストーリー。

初めての作品です。つたないストーリー、つたない文章ですが、おおらかな気持ちでぜひお読みください。感想を書いていただける

ととっても励みになります！ただし強烈な批判はご勘弁を・・・

第1話

（なんだったんだ、今のは。こんなことが、こんなことがあるなんて。）

たちばなかずと

橘和人は歩道の真ん中に突っ立っていた。目は見開いているが、何も見えていないようだった。左手には携帯電話。口がぽかんとあいている。後ろから来ていた女の子2人が、まるで危ないものを見るかのように、無言のまま追い抜いた。

和人はごくんと唾を飲み込んだ。そして息を大きく吸い込み、ゆっくり「ふうっ」と吐いた。家へは5分ほどで着く。とにかく落ちて着いて頭を整理したかった。和人は、携帯電話を握りしめ一目散に走った。

「ワン、ワン、ワン」

玄関脇でクロベエがしっぽを振って出迎えた。クロベエは和人の父が3年前に友人から譲り受けた黒いシェパードで、年齢は5歳だ。「ただいま、クロベエ。今日はお母さんと散歩に行けよ。」

そう言うんじゃないくるクロベエを無視して玄関を開けた。

「ただいま。」

「お帰り。走ってきたの？何かあった？」

「別に、何もないよ」お母さんの問いかけを遮るように、和人は自分の部へと急いだ。

ドアをあけ、鞆を下ろし椅子に座る。

そして左手のこぶしを机の上に置き、そっと手を開いた。

手の上には携帯電話。

その携帯電話をじっと見つめながら、先ほどの鮮烈な出来事を思い返した。

橘和人は、市立緑丘中学の3年生。サッカー部に所属しているが、その日は2学期の期末テストの前日ということで、授業が終わるとすぐに下校した。

「はあ、明日からテストか。」

和人の成績はいつも上位だった。だが、最近は部活でくたくたになり、家での勉強がおろそかになっていた。よほど勉強しないと、クラスで5位以内に入るのはむずかしいだろう。

「よっ、早く帰って猛勉強しようと企んでるな。むだなあがきはやめなさ〜い。」

と言いながらお調子者の園山英が後ろから近寄ってきた。右手にサッカーボールをかかえている。園山英も同じサッカー部の3年生だ。

「部活と勉強の両立？男なら一つのことには打ち込むべきだろ。俺なんか勉強したいのを我慢して寝ても覚めてもサッカー一筋だぜ。」

「いいよな、クラスで最下位が定位置のやつは。それ以上落ちないんだから。」

「なあ和人、30分だけ付き合えよ。パスくらいやんねえと体がなまっちまって熟睡できねえんだ。」

「悪いけど、俺まじで追い詰められてんのよ。へたすりゃ徹夜なんだから。」

「ちえっ、つまんねえの。今日から2日間パス五郎と練習か。」

パス五郎は英の家の塀に描いた絵で、緑丘中学校サッカー部のユニフォームを着ている。キャプテン翼の日向小次郎がモデルだが、あまりにも似ていないのでパス五郎と名づけた。英と和人の共同作だ。英は暇なときはいつもパス五郎とパスの練習をしていた。

「じゃあな、勉強しすぎて熱出すなよ。熱出して学校休んだら最下位になるぞ。」

「へえ、やさしいじゃん。」

「最下位はおれのポジションと決まっているの。おれのポジションを脅かすやつは、何人たりとも許さねえ。じゃあな。」

英は笑いながら前川サイクリングと書かれた店の角を左へ曲った。和人の家はそこを曲がらずに横断歩道を渡って行った1キロ程先にある。

「じゃあ。」和人は英の後ろ姿に声をかけた。そして横断歩道を渡りしばらく歩いた。

すると、10メートル程前の歩道で何かがきらりと光った。

近づいてみると、それは見たことのないタイプの使い古したような携帯電話だった。

和人はそれを拾ってみた。

（めんどろだな、交番はちょっと遠いし、かといってここに置いておくわけにもいかないし・・・）

和人は迷い、何気なくその携帯電話を開いた。

液晶画面は電池とアンテナのマーク、その下に日付と時刻が表示されているだけの極めてノーマルなものだった。

（あれ、これは何だ？）数字の「0」のボタンの下に、四角く真つ赤なボタンがあった。

ボタンの表面には黒い文字で「STOP」と書かれている。

和人はその文字にちよつとした違和感を感じた。

そもそも赤い色に黒の文字なんて読みにくい。

その他のボタンは白地に黒で表示されているのに、なぜこのボタンだけ読みにくくしたのか。

その文字をじっと見つめる和人の目が大きく見開いた。

よく注意してみないと気付かないのだが、その「STOP」という文字はボタンの少し左側に寄っていた。しかも他の文字と比べて少し太いような気がする。

和人は何気なくそのボタンを押してみた。

しかし液晶画面は何も変化が起きなかった。さらに3回押しても

変化はなかった。

（何かの操作をした時に、それを取り消すためのボタンだろうか。）
そう思いながらも一度そのボタンを押した。

その時どこからか救急車のサイレンが聞こえてきて、和人はボタンを押したまま顔をあげた。

左手の遠くで聞こえてきたようだったが、3秒くらいするとサイレン音がピタッと消えた。

しかも――

サイレン音だけではなく、すべての音が消えたように急に静まり返ったのだ。

何が起こったのか。

和人は手に持っていた携帯電話に目を移した。

なんと液晶の画面が眩いばかりに白く光っている！

そしてその画面の中に、赤い文字でこう表示されていた。

「Time must stop!」

（「時間よ、止まれ！」ってどこか。本当にそんなことが起きればいいけどな。）そう思いながら和人はふと道路側を見た。

すると：

横を通過しようとしていたはずの車が、止まっている。

運転手は前方を見つめてピクリとも動かない。

次に後ろを振り向いた。

20メートルほど後ろを歩いている女の子2人が、不自然に止まっている。片足は地面から浮き、少し前かがみに、そして顔はお互いに見合わして一人の口は横にあいている。それはまるで、話をしながら歩いている二人の体が、突然固まったかのようにだった。

（止まっている。

確かに止まっている。

時間が…止まっている！）

和人は恐ろしくなり、すぐに携帯電話のSTOPボタンをもう一度押した。

すると、・・・ 時が、動きだした。

第2話

「止まった・・・、よなあ」和人は自分で自分に話しかけた。

「夢じゃない・・・、よなあ」右手のこぶしで軽く太ももを叩いてみた。

少し痛い。確かに夢じゃないことがわかった。

和人はもう一度、ふうーっと大きく息を吐いた。

（やってみるか、でももし、もしもだ、さっきみたいに時が止まったとして、その後この携帯が壊れたりしたらどうなるんだろう。）

和人は右手の人差し指で左の腕の内側にある3センチほどの古傷を触っていた。考え事をするときの和人の癖だ。

（止まった時の中で一生を終えるんだろうか、誰とも話すことなく……。でも待てよ、この携帯の電池が切れたら、そうしたらまた時が動き出すんじゃないだろうか。）

和人は5秒ほど目を閉じた。

確信はまったくなかった。でも、あれこれ迷っていても永久に答えは出ない。それに何より、和人はこの興奮を抑えきれなかった。テレビや映画の中だけと思っていたSFの世界が、すぐ目の前にある。

和人は恐る恐る「STOP」ボタンを長押ししてみた。

すると、先ほどと同じように液晶の画面が白く眩しく光った。

雑音が消えた。周りを見渡した。部屋の風景は何も変わらない。

当然だ、自分以外に動くものが何もないのだから。

（どうだろう、時は止まったんだろうか。）

和人は息を殺して立ち上がり、窓の外を見てみた。

窓の下の道は誰も通っていなかった。

（何も音がしない。時間が止まっている証拠なのかな。）

和人は緊張を沈めるように、ふうっと息を吐いた。

何気なく電柱を見た和人の体が、固まった。

カラスが宙に浮いている！羽ばたいて飛んでいるのではなく・・・、浮いている。

電線から今まさに飛び立ったという感じで、両方の翼を広げたままで電線から10センチほど上に、止まっている。

（やはり、やっぱり、さっきと同じように時間が止まった！）

和人は眼を見開き天井を見上げた。全身に鳥肌が立ち心臓の鼓動がやけに速く動いた。こんな緊張の連続は初めてだった。

（落ち着け、少し落ち着かないと…）

和人はまた、大きくふうーっと息を吐いて先ほどの椅子に座った。

目の前にシャープペンがあった。それを転がしてみる。コロコロコロと音がした。

次に声を出してみた。小さくそっと「あー」。いつもの声だった。窓を開けてみた。風は、ない。

「このままどこか別の場所に行ってSTOPボタンを押したら、どうなるんだろう。」

和人はつぶやいた。

「体が別の場所に移動するっていうことになるんだろうか、つまり：瞬間移動？」

和人は頭の中がどうにかかなりそんな感じがして、STOPボタンをもう一度押した。

時がもどった。

和人は窓の外のカラスを見ていた。カラスはせわしく羽ばたき、どこかへ飛んで行った。

「はあ、…疲れた。」

つぶやいて和人はベッドに横たわり、そっと目を閉じた。この携帯を拾ってから30分も経っていないのに、5・6時間も経ったような感覚だった。

でも実際は言うほど疲れてはいない。疲れるところかますます気持ちが高ぶって来て、頭も冴えてきた。

（すごい。すごすぎる！俺は今日から超能力者だ！）

和人は目を瞑りながら考えた。

（明日クラスのみんなに話したらどうなるだろうか。なかなか信じていだろうな。でも本当に時間が止まることがわかったら、みんなこの携帯を使ったがるだろうな。うわさはたちまち日本中に広まって、俺は毎日テレビ番組に引っ張りだこ。でも待てよ。この携帯の持ち主が現れたら…？うーん、当然返さないといけないな。しかも交番に届けなかったことをみんなが何と言うだろう。）

そこまで考えて急に罪の意識が芽生えてきた。

（これはもしかしたら、とんでもないことをしてしまったのかもしれないぞ。落とした人は今頃これを探しているにちがいない。…そうだ、アドレス帳や電話の履歴で持ち主が誰かわかるかも。）

和人はすぐに調べてみた。しかし不思議なことに何一つ手掛かりとなるものはなかった。アドレス帳にも電話の送受信の履歴にも。

この携帯の電話番号さえ見つけることは出来なかった。

（するとこの携帯は、時を止めるためだけにしか使っていなかったということか。）

「和人、お風呂入れたからいつでも入っていいわよ。」

突然ドアの外からお母さんの声が聞こえてきた。

「勉強がひと段落ついてから入るよ。」

和人はドアを開けられるかと思い、ベッドから椅子へ慌てて移動した。

「そう、頑張ってね。今晚はおいしいおかずを作っとくわ。」
お母さんはそう言ってドアから遠ざかって行った。

（そうだ。明日大事なテストだった。時間がもったいない。）

和人は急に現実に取り戻されて慌てた。

（・・・でも待てよ。）

和人は携帯電話に目を向けた。

（時間がもったいないだって？）

ごくんと唾を飲み込む。

（とんでもない、時間はいくらでもあるじゃないか！）

携帯電話を見つめる和人の目が輝いた。

第3話

「おはよう、ああ、お腹すいたー。」

台所の前を通りながら和人は母・由紀枝に言った。

「あら、早いわね。でも夕べあんなに食べたのにお腹すいたなんて、もしかしてあんまり寝てないんじゃないの。」由紀枝がいぶかしげに言った。

「いや、その顔は十分に寝たっていう顔だな。」

居間に座っていた父・正和が顔の前の新聞紙を下げながら、話に割って入った。

「今日からテストなんだろう、どうだ自信の方は？」

「うん、けっこう自信あるよ。」和人がすぐに答えた。

「ほう、めずらしいな。和人がそんなに言うなんて。」

父と母は顔を見合わせた。

「さすが私の息子だわ。私も試験のとき、問題が配られるまでは自信満々だったのよ。」

由紀枝が少しおどけて言った。

和人は一人っ子だ。

普通男の子が中学3年生にもなると、親とあまり話をしなくなりがちだが、和人はそうではなかった。

いつも冗談を言い合える雰囲気がこの家にはあった。

父は小学校の教員で、母は近所のデパートのパート社員だ。

父も母も仕事の話は極力家庭に持ち込まないようにはしていたし、この家ではいつも和人を中心に物事が決められていた。

「さあ、今日は純日本風の朝食よ。」お母さんがテーブルに料理を運んできた。

ご飯、漬物、味噌汁、焼き魚、生卵、いつもの朝食だ。

「今日は」じゃなくて、」今日も」だろ。いただきます。」
言うが早いのか、和人はがつがつとご飯を食べ始めた。

「それじゃお父さんも、いただきます。」

お父さんが和人の真似をして言った。

すると「お母さんもいただきます。」と続く。

いつもの橘家の朝の風景だ。

和人は試験の日の朝だというのに、とても落ち着いていた。

昨夜はかなり勉強したし、睡眠も十分とった。

止めた時間は正確にはわからないが、だいたい24時間くらいだと和人は計算していた。

その間は食事もあった。

食パン1袋とリンゴ2個だけだった。

パンを焼こうとしてオーブントースターを使おうとしたが、電気が働かないらしく熱が発生しなかった。

止まった時間の中では電気製品は使用できないらしい。

水道の蛇口をひねってみた。やはり水は出てこなかった。

圧力も止まった時間では作用しないということか。

重力は、おそらく自分の体にだけしか働いていないのだろう。

何しろカラスが宙に浮いていたくらいだから。

和人はものすごくお腹がすいていたので、すぐに食事を終えてしまった。

「ごちそうさま。」そう言って、部屋に戻り制服に着替えると、和人はすぐに家を出た。

クロベエのワンワンと吠える声が響いた。

「今日はいつもより早いんじゃないか？」

「きっと学校で試験前に勉強したいんじゃない？」

父と母はそう会話した。

でも和人の狙いはそうではなかった。

昨日携帯電話を拾った場所に、もしかしたら落とし主が来ているんじゃないか。

或いはこの時間にはいなくても、昨日探しに来た痕跡があるんじゃないか。

例えば電柱にでもチラシが貼られているような。そんな気がしていたのだ。

和人はその場所にやってきた。

でも探し物を見つけているような人はいないし、チラシなんかもなかった。

いつもと変わったところは何も感じられなかった。

他人の物を拾って持っているということに、罪の意識がないわけではなかった。

でも試験期間中だけ借りていたいと和人は思っていた。

（試験が終わったら交番に届けよう、その日別の場所で見つけたことにして。）

今ここにきて、誰もいなかったことでその思いはさらに強まった。

和人はそのまま学校へと向かった。

しばらくすると前方に英の姿が見えてきた。

和人は早歩きで歩き、やがて英に追いついた。

「よっ、英。今日はサッカーボール持ってないんだな。」

いつもサッカーボールを手放さない英が、なぜか今日は持っていなかった。

「えっ？」誰が話しかけてきたんだ？とでも言うように、英が振り向いた。

そして2秒間ほど和人を見つめて、今度はほっとしたような感じで「ああ、和人か。」とつぶやいて歩きだした。

「ああ、和人か、じゃないよ。どうしたのお前、何かあったのか？」
「いや、何もないよ。全然、ほんとに、まったく、何にもございませんぜ、橘の旦那。」

英がにっこり笑って答えた。

「じゃあサッカーボールはどうしたんだよ。」

「サッカーボール？ああ、今日はサッカーボールの日だよ。知らなかった？イギリスでサッカーボールが誕生した記念の日。だから、特別に休ませてるってわけ。」

「はいはい、まあ、どうでもいいや。ところで少しは勉強した？」

「勉強？この天才が家で勉強なんてするわけないじゃん。まっ、平凡な頭脳を持つ君たち庶民にとっちゃあ、羨ましすぎるだろうけど。」

「じゃあ、全くやらなかったのか？実力テストの前日だって言うのに。」和人が呆れたように言った。

すると、英が急に立ち止まった。

「実力テスト？おい、今日は実力テストがあるのか？」

「昨日部活が休みだったのは、何のためだよ。」

「・・・」

「別にいいじゃん。クラスで最下位のポジションは誰にも譲れないんだろ。」

「・・・」

「どうしたんだ？やっぱりちょっとおかしいぞ。」

和人がいぶかしげに顔をしかめた。

「・・・いけねえ、どうやら俺は記憶喪失になったみたいだ。先生わかってくれるかな。」

「きつとわかってくれるよ。」和人が突き放すように言った。

学校に着いた。和人は下駄箱で室内用のシューズに履き替えようとした。

だが、なぜか隣のクラスの英が和人にくっついてくる。

「お前は2組だろ。」と和人は2組の下駄箱の方を指さした。

「おう、そうだった、そうだった。俺は2組だったのね。」

と言いながら英はそちらに向かっていった。

和人は気になって英を見ていた。

英の下駄箱は棚の左、一番下の段だったのだが、英は上の段の方を片っぱしから眺め始めた。

その次に真ん中の段、最後に一番下の段に目をやり、やっと自分の名前を見つけたような素振りをした。

英は和人が自分の方を見ていると気づいていたのだろう。

自分の下駄箱を見つけた後、和人の方を振り向き右手の親指を突き出してニコツと笑った。

「記憶喪失ねえ。ちょっとやりすぎなんじゃないの？」

和人は小さな声でつぶやいた。

第4話

試験が始まった。

携帯電話は、かばんの中にあつた。

でも、試験の最中に時を止めるつもりはなかった。

考えなかったわけではない。

時を止めてカンニングをすれば、クラスで一番の成績をとれる。

でも、和人はそれだけはしたくなかった。

そんなことをしても何の意味もないということがわかっていた。

それに、自分だけが時を止めて十分な勉強時間を得ることができたということだけでも、クラスメイトに対してかなりの後ろめたさを感じていたのだ。

1時間目数学、2時間目英語、昼食をはさんで3時間目社会、4時間目保健体育と、あっという間に1日目の試験が終わった。

和人は十分な手ごたえを感じていた。

今日の4教科だけを考えれば、クラスで5位以内に入っているかもしれない。

そして明日のテストでさらに良い点が取れば、1位だって夢ではない。

（よし、今日も納得がいくまでガンガン勉強しよう。そのための時間は十分にある。）

昨日の和人の心境がうそのようだ。

（そうだ、1時間くらいなら英に付き合ってもいいな。）

和人は隣のクラス（2組）の英を探した。

2組は和人のクラスの1組よりも3分程先に下校していた。

（たぶんすぐに追いつけるだろう。）

和人は英に追いつこうと急いだ。

十数人追い越し、やがて前方に英の姿が見えてきた。
英と同じ2組で和人も仲がいい前川徹也がいつしよだ。

「よっ英、記憶は戻ったか？」

和人が追いついたと同時に話しかけた。

「ん、ああ、だんだん思い出だしてきたよ。」

英が笑顔で答えた。

「記憶って、何の事？」

徹也が不思議そうに尋ねた。

「今朝、英のやつ自分の下駄箱がどこなのか覚えてないっていうんだよ。」

「なに、もうボケの兆候が出てきたの？英は人の何倍も頭使わないもんな。」

「余計な御世話だ。」

英が徹也の顔の前にこぶしを突きつけて言った。

「ところで英、今日なら1時間くらい付き合ってもいいぞ。」

「何を？」

「サッカーに決まってるじゃないか。」

「ああ、サッカーか。でも明日も試験があるしな。」

和人と徹也が顔を見合わせた。

「まさか英、帰って勉強するつもりじゃないだろうな。」と徹也。

「そりゃあ俺だって試験の前日ぐらい勉強するさ。」

和人と徹也はまた顔を見合わせた。

「ほら徹也、やっぱりおかしいだろう。」

「絶対におかしい。英、熱でもあるんじゃないか。それとも俺は夢を見ているのか。」

「大げさだよ。とにかく、俺は帰って勉強すんの。じゃあな。」

英は二人に向かって軽く手を挙げると、前川サイクリング店の角を左に曲がった。

和人は立ち止まり徹也に向かって「どう思う？」と訊いた。

「そうだな。」

徹也はちらっと空を見上げて、

「明日は雨だな。」

にっこり笑い「じゃあ。」と、前川サイクリング店へ入って行った。
そこが徹也の家だった。

「じゃあな。」和人は、横断歩道を渡り始めた。

（そうだ、何か食べ物を買っておいた方がいいな。）

そう思いつくと、帰り道の途中にあるコンビニエンスストアに入り、菓子パンとジュースを買った。

第5話

家に着くと、和人はすぐに携帯電話をかばんから取り出した。

（今日も頼むぜ、ケータイ君）

携帯電話のSTOPボタンを押そうとしたその時、和人は大事なことに気がついた。

電池表示が3分の2に減っていたのだ。

（そうだ、お父さんの携帯の充電器を借りましょう。この機種に合ってくればいいんだけど。）

母・由紀枝はまだデパートの勤務から帰っていなかった。

週に3度は夕方の勤務になっていて今日はその「遅出」の日だったのだ。

父・正和の帰りはいつも7時頃だ。

和人は居間にある正和の充電器を自分の部屋に持ってきて携帯電話に差し込もうとした。

だが、残念なことにその充電器の差し込み口は若干大きくて合わなかった。

（困ったな、どれくらいもつんだろう。あと1日だけでもってくれればいいんだが。）

和人が最も恐れたのは、時間を止めた後で電池が切れてしまうことだった。

時間を「再起動」することができなければ、和人は止まった時間の中で、誰とも会話することなく一人寂しく死んでいくことになるかもしれない。

（さてよ、昨日は3回も時間を止めた。しかも3回目はかなり長かったはずだ。おそらく1日分くらいの時間。それでも電池表示が3分の1しか減っていないということは、あと1回くらいの使用は十分大丈夫だろう。電池表示を見て、3分の1になったら「再起動」

すればいいんだし。」

和人は決心した。

そして携帯電話をにらみつけるようにして、STOPボタンを――
押した。

携帯の画面が目くらむような白い光に包まれ、その中に「Tim
e must stop!」という赤い文字が浮かんだ。

そして――。

和人は机の上の目覚まし時計を見た。

秒針が止まっている。

時間は確かに止まったようだった。

（電池の表示は？）

はっとして目覚まし時計から携帯電話へ目を移した。

「はぁ……」和人の口から安どの声が漏れた。

電池表示は3分の2のままだった。

「さて、しっかり勉強するぞ！」

和人は思わず声を出した。

第6話

「ふう、これで何とかいけるかな。」

和人は椅子に座ったまま大きく伸びをした。

携帯の電池は、3分の1に減っていた。

電池が切れる前に再起動しなければならぬ。

電池が切れたらどうなるのか、それはわからなかったが、試してみるには余りにリスクが大きかった。

和人はSTOPボタンを押した。

― 時が再起動した。

夕食までは少し時間がある。

和人はクロベエを散歩に連れていくことにした。

和人の姿が見えるとクロベエは、ワンワンと吠えてはしゃぎまわった。

「クロベエ、お座り。」

クロベエはハッハッと荒い息を吐きながら、きちんと「お座り」をしてリードをつけてもらった。

「よし。」という和人の声で、クロベエが駆けだした。

和人はクロベエに引っ張られるようにして、軽く走った。

散歩のコースはいつも決まっている。

車の通りが少ない道を約30分かけて歩く。

10分ほど行くと、柴犬のような栗色の小さい犬を連れた女の子が、前方からこちらへ向かってきた。

和人はその女の子を知っていた。

1学年下でバスケット部の月野という苗字の子だった。

いつも明るく愛嬌のある子で、2年生はもとより3年の男子の間で

も可愛いと評判の女の子だ。その女の子との距離が10mにまで近くなった。

すると、その柴犬らしき犬が、クロベエに向かって吠えだした。

クロベエも少し止まって身構えたが、飼い主が柴犬を引き寄せているのを見て、安心したのだろう、前方を向きゆっくりと歩き出した。「だめよ太郎、だめ。」

月野という女の子が必死でなだめるが、吠える声はますます激しくなってくる。

ちょうどすれ違う瞬間、和人と月野の目が合った。

月野は和人を見て、申し訳なさそうに軽く会釈をした。

和人も会釈を返す。

と、その瞬間、

「きゃっ！」

月野が短い悲鳴を漏らした。

手から紐が離れ、太郎という犬がクロベエに向かってきたのだ。

クロベエは素早く身構え、「ぐううう」と低く吠えて威嚇した。

太郎という犬は吠えながら、クロベエの1メートル程前を、跳ねたり飛びつきそうな姿勢をとったりして、右へ左へめまぐるしく動いた。

「大丈夫。クロベエは自分より弱い相手をけがさせたりしないから。」

和人は月野の方に向かって（なるべく目を合わせないようにして）話した。

実は和人はかなりのあがり症で、女の子の顔を見ながら話をすることができなかったのだ。

月野は「すみません！」と言いながら犬のひもを捕まえようとしていた。

だが、なかなか捕まえきれない。

「捕まえた！」

月野はようやく引き紐を捕まえて、ぐっとクロベエの方から引き離した。

「本当にすみませんでした。」

「ううん、大丈夫。」

和人は、少しだけ勇気を振り絞り月野の顔を見てみた。

月野はすまなさそうに、ちょっとはにかみながら和人を見ていた。

左のほほにできたえくぼがチャーミングで、和人の顔はみるみる真っ赤になった。

「いくぞ、クロベエ。」

和人は急にバツが悪くなって、月野に背を向けて歩きだした。

第7話

翌日の試験も、和人はまずまずの手ごたえを感じていた。

（何とか無事に終わった。それもこれもこの携帯のおかげだ。）

和人は鞆の中に、携帯電話を入れて来ていた。

できれば自分のものにしたかった。

だが、この携帯を落とした人の気持ちを考えると、それはどうしてもできなかった。

和人は授業が終わったらそれを交番に届けるつもりでいた。

ホームルームが終わり、下駄箱に来てみるとちょうど英が靴に履き替えるところだった。

「よう英、今日から部活だな。」

「そうだな…、久しぶりの部活だ。」

英は感慨深げな感じで答えた。

ああ、やっと部活が始まった。長かったあ！——こんな感じの答えが返ってくると思っていた和人はちよつと戸惑った。

「あ、俺ちよつと部活の前に行くところがあるんだ。先に行つてて。」

和人は英にそう言うのと校門の方に向けて歩きだした。

最近急に英の様子がおかしくなった。何か悩みでもあるんだろうか。

（後で直接本人に聞いてみよう。）

校門を出て、交番を目指した。交番は10分ほど歩かなければならない。

話す内容はじっくり考えて決めていた。

それを再度確認しながら歩く。

こう訊ねられたらこう答えて、さらにこう訊ねられたらこう答えよう。

そんなふうを考えながら歩くと、あつという間に交番についた。和人は南町交番と書かれた看板が、いつになく物々しく感じた。交番に入るのは初めてだった。

一人の若い警察官が、椅子に座ってパソコンを操作していた。

「あの、すみません。」

和人は交番に入るなりそう切り出した。

「今朝、歩道でこの携帯を拾ったんですが……。」

若い警察官は元気なはきはきした声で答えた。

「ああ、拾得物ですね。んーと、拾った時の状況を教えてもらえますか？ あつその前にここに座って。」

警察官は和人を椅子に座るように促し、書類を出した。

「まず時間だけ……。」

和人は聞かれるままに時間、場所、その時の状況、自分の住所、氏名など、準備していた答えを述べた。

「だいたいわかりました。携帯電話の場合には、落とし主が警察に届け出る場合が多いから、たぶんこれも届け出がされるでしょう。もしかしたらもう出ているかもしれない。そうだ、ちょっと待って。」

警察官は、どこかへ電話し始めた。

「もしもし、こちら南町交番から橋田です。ええ、……はい、実は携帯電話の拾得物がありましたので、そちらに届け出はなかったでしょうか。今朝拾ったそうです。……ああ、はい、そうですか、わかりました。一応書類をFAXしときます。それでは失礼します。」

ガチャッと電話を切った後、警察官が、

「まだ本署にも届け出はされてないらしい。まあ、すぐに落とし主がわかるだろう。届けてくれてありがとう。」

そう言って警察官は立ち上がった。

それはもう帰っていいということを、意味していた。

だが和人は気になっていたことを尋ねた。

「落とし主が現われなかったらどうなるんですか。」

橋田という警察官はちよつとびっくりしたようなしぐさを見せたが、冷静に答えた。

「そうだな、通常の拾得物の場合、拾ってから6ヶ月を過ぎても落とし主が現われなかったら、拾った人のものになるんだけど、携帯電話の場合には個人情報が含まれているし、電話会社との契約がからんでくるから、そうはいかないかもしれないな。」

「じゃあもし、この携帯にそういう個人情報がなく、契約もされていなかったらどうですか？」

和人がくいさがった。

「確かにその場合には、君のものになるだろうけど、君、使ってたの？」

警察官がいぶかしげに答えた。

「い、いえ、使ってません。それじゃ失礼します。」

和人はそう言う足早に交番を出て行った。

第8話

「ファイト、ファイト！」

1年生の元気のいい掛け声がグラウンドにこだましていた。

和人がグラウンドに着いたのは、練習開始から20分ほど過ぎた頃だった。

「すみません先生、落とし物を交番に届けてきたものですから。」

サッカー部顧問の楠田はそんなことはどうでもいいというような顔で、

「わかった。急いでアップを済ませろ。すぐにミニゲームをやるぞ。」

と言った。

楠田は和人のクラスの担任でもある。数学の教師だ。

教師3年目の若手でサッカーの経験はなかったが、とにかく熱い。その持前の情熱で、指導力はこの2年半で各段に進歩していた。

3年生の和人にとっては、中学生最後の大会“県西部地区対抗戦”が1ヶ月後に迫っていた。

県大会や全国大会出場をかけるような大きな大会ではなかったが、県西部地区中学校18校の

威信をかけた大会だった。

サッカー、野球、バスケット（男女）、バレーボール（男女）、卓球（男女）の5種球技の総合

点で、優勝校が決まる。

当然その8つのクラブは、学校全体の注目の的で、否が応でも練習に身った。

楠田は全部員をA B C Dの4チームに分け、総当たりの15分ミニゲームをさせた。

和人はBチーム、英はCチームに決まった。

「おいおい、Bチーム反則じゃねえの？揃いすぎだよ。」

たまたまBチームに主力が集まったため、他のチームから不満の声が出た。

「悪いな、今日は全部勝たせてもらうよ。」

キャプテンでフォワードの清水が笑いながら言った。

ゲームが始まった。

Bチームはやはり強かった。

3－0、4－1で勝ち、後は英のいるCチームとの対戦を残すのみだ。

対するCチームは意外な強さを見せていた。

5－3、6－3とこちらも2勝。

特に英の動きがかなり切れていた。

「いいか、英を楽にプレーさせたらだめだ。今日のあいつは何かが乗り移っているぞ。」

清水の声に、和人は笑いながらうなずいた。

「俺ががんがんプレッシャーかけてやるよ。そろそろ英の体力も切れかけるころだしな。」

英はテクニシャン肌だったが、すぐに疲れるという欠点があった。

案の定、センターラインに並んだ英の顔は気だるそうだった。

「ちょっと飛ばしすぎたな英、体力は肝心のゲームにとっとなかきや。」

和人が余裕っぽく言った。

「笑ってられるのも今のうちだ。俺らが勝ったらコーラおごれよ。」
英が肩で息をしながら返した。

「いいよ。でも負けたらどうする？」

「逆にコーラおごってやるよ。」

「その言葉忘れるな。」

ピーツ。ゲーム開始の笛が鳴った。

第9話

Bチームは2年生ながらチームの要、トップ下の松永がゲームを組み立てた。

ゴールキーパーも2年生で、185センチの長身、金井。ディフェンスで攻撃にも参加するリベロの和人。

そしてキャプテン清水のほか1年生が3人いた。

総合力では、明らかにCチームに勝っていたし、最初の5分間はほとんどボールを支配していた。

英はというと、なんとかパスカットしようと走り回っていたが、Bチームに思うようにボールを回され、荒い息を吐いている。

そしてついに清水のボレーシュートが決まった。

「ようし、この調子であと2点取るぞ。」

「清水さん、ハットトリック狙ってください。どんどんパス出しますから。」

松永の声に、すぐに英が反応した。

「おい松永、調子に乗るなよ。ゲームはこれからだ。」

英はそう言うと、Cチームのメンバーに何やら指示をし始めた。

「ポジションを変えるぞ。おれがセンターバックをやる。みんなはおれがボールを持ったらずすぐに攻撃に切り替えてくれ。加藤はもつと左に寄って、勝本は……。」

それを聞いて清水が和人に耳打ちした。

「おいおい、向こうは英がディフェンスをやるらしいぞ。かなり走っていたからな、疲れたんだ。こりゃあますます点が入りそうだな。」

「でも英がディフェンスやるってのはめずらしいな。何か考えがあるのかも。」

「ないって、ほら、ガンガン攻めるぞ。」

清水はそう言うときックオフのボールにプレッシャーをかけに行っ

た。

相手のパスが英に渡る。

「森田、走れ！」

英は相手ゴールに向かってボールを強く蹴った。

3年生で俊足の森田が、ボールに追いついた。

和人がマークする。

「勝本、フォローだ。加藤はもっと右に。」

英がてきばきと指示すると、Cチームのボールがつながり出した。

「今だ、来い。」

英がボールを持った選手と交差するように走ってきてパスをもらった。

スクリーンプレーだ。

英に和人が詰める。

1対1。

英がフェイントをかけてきた。

ボールをまたぐ、1回、もう1回。

和人はついていくのがやっとだった。

そして英が左にけり出し和人も反応した。

だが、英はボールと一緒に和人の右を抜けて行った。

――鮮やかなフェイント。

完全に置き去りにされた和人の目に、英がキーパーをかわしシュートを決める姿が映った。

（何だ今のフェイントは！こんなの今まで見たことがないぞ。）

和人は悔しいというよりあっけにとられていた。

そして思わず「すげえ…」とつぶやいていた。

「やられたな和人、次は止めてくれよ。」

清水が駆け寄ってきて言った。

「いや、無理だ。俺一人では止められない。それにあいつ…。」

「大丈夫だって、それにもう英にフリーで持たせないよ。」
清水はそういうとボールをつかみセンターサークルにかけて行った。
（そうじゃない。フェイントは確かにすばらしかったけど、それに
加えて状況判断がすごいじゃないか。）
和人はそう思ったが、口には出さなかった。
この後のプレーで英がそれを皆に思い知らせるにちがいないと思っ
ていた。

しかし、和人の考えは当たらなかった。
英の足が両足ともつり始めたのだ。

あっけなく勝負は決した。
大黒柱を亡くしたCチームは、次々に得点を許してしまった。
終わってみれば5対1。

清水が3点、松永が1点、そして和人も1点入れた。

「ま、ほかのチームにはちよっと気の毒だったな。俺らが強すぎた。」
「

清水は誇らしげだった。

「ちえっ、俺の足がたらなかったらゲームはわからなかったさ。」

「足がつるってことは、鍛え方が足りないのだよ、園山君。それも
実力のうちってこと。」

「はいはい。」

英はちよっとムツとした顔をしたが、言われていることは当たって
いたので、それ以上返さなかった。

和人はその様子を見て笑っていた。
もちろんゲームに勝ったから気分は良かった。
でも、それよりももっと嬉しいことがあったので、顔が自然とほこ
ろんできたのだ。

その嬉しいこととは、チームに最も必要な選手――司令塔”の誕生だった。

第10話

「英、ちゃんとコーラおごれよ。」

「わかってるよ、かつお節に二言はない。」

「えっ？お前かつお節なの？ていうかそれを言うなら武士だろ、ただの武士。」

サッカー部の部室で、練習着から制服に着替え中の和人と英の会話だ。

「でも英、今日のゲームすごかったな。」

「ああすごかったよ、お前のロングシュート。」

「そうじゃないよ、とぼけるな。体のキレ、フェイント、視野の広さ、たった2日間でどうすればあんなに進化するんだ。楠田なんて、ノートを取り出してポジション組みなおしてたぞ。たぶん松永をサイドに移動して英がトップ下に入るんじゃないか。」

「ポジションはどこでもいいんだけど、うーん、一言で言うと”目覚めた”ってとこかな。むずかしい言葉でいえば、…なんだっけ。」

「^{かくせい}覚醒とか？」

「そう、それぞれ覚醒。和人、お前中学生のくせによくそんな難しい言葉知ってるな。」

「あほらしい。お前だって知ってるじゃんか。」

「ん、…ああ俺も中学生か。なるほどなるほど。」

「何わけわかんねえこといって…。」

「いててて！あ、足、足つった！」

英がズボンに片足入れたところで大声を出して座り込んだ。

「重症だな、タクシー呼んでやろうか、橘家経由になるけど。」

英の足を延ばしてやりながら和人が言った。

「普通はけが人を先に送り届けてから帰るもんじゃないのか。いいよ、足つったぐらいでタクシーなんて使ったら親に怒られちゃう。」
和人に肩を貸してもらい英が立ち上がった。

「行こうか。」

二人はゆつくりと部室を出た。

「何にやけているんだよ。気持ち悪いぞ和人。」

「県西部地区対抗戦が楽しみだっと思ってたんだ。」

「ああ、県西部か。異様に盛り上がってるな。うちの学校、今年はけっこういいところ行くかもしれないしな。」

「だろう？ バスケと卓球が優勝候補らしいから、これに俺達サッカー部がベスト4にでも入れば20年ぶりの総合優勝も夢じゃないぞ。」

「俺たちがベスト4？ 県大会で2回戦敗退の俺たちがか？ むちゃ言うなよ。」

「いや、あり得ないことじゃないぞ。うちは割と個人の力はあると思うんだ。今まではそれがかみ合わなかったただけだ。英が司令塔になって今日みたいな働きをすれば、絶対に強くなる。」

「おいおい、楠田の熱血がついに感染したな。和人ちょっと離れてくれ、俺にまでうつる。」

「ひどいなあ、こっちは真剣なのに。」

少し考えた後、英が言った。

「でも和人、そのもくろみも俺の体力次第だな。今日みたいに足がつつたら俺はアウトだ。」

「今日足がつつたのは、必要以上に走り回ったからだよ。1試合ならもつさ。」

「いや、走り回ったせいで足がつつたんじゃない。和人を抜いた時みたいにさ、頭で考える動きに無理やり足を動かしたから、足に負担がかかりすぎたってこと。」

「どういうこと？」

「つまり、…体力がないってことだ。」

「わかんねえな。じゃ負担かけないようにセーブしたらいいじゃないか。」

「セーブしてたら今日和人は抜けなかったさ。」

和人は理解に苦しんだ。

自分の頭が足に指令を出すのは、足の力の限界の一步手前までだろう。

すると英は今日のゲームで、足の限界を無視して足に指令を出したってことになる。

そんなことができるんだろうか、自分の足なのに。

「和人、お前がやさしいのはわかってるけど、家まで送ってくれなくても大丈夫だ。」

気がつくと前川サイクリング店の角を左へ曲がっていた。

和人の家はそこを曲がらずに、まっすぐ横断歩道を歩いたずっと先にある。

「いけね、俺の家はあっちか。」

「実はお前の方が疲れてるんじゃないか？体力つけろよ、じゃあな。」

英が笑って手をあげた。

「じゃあ。」

和人も手をあげて笑った。

第11話

サッカー部の練習は、日に日に厳しくなっていた。

土・日曜日は練習試合が組まれ、対戦相手が見つからないときは高校生とも試合をした。

顧問の楠田は、和人の予想通り英をトップ下に決め、他のメンバーとのコンビネーションを色々と試しだした。

そして試せば試すほど、英のポテンシャルが抜きんでていることを、誰もが認めざるを得なかった。

特に実践での動きは、相手チームが目を見張るほどだ。

英のポジションは、これまでは右のウイングだった。

足が速くトリッキーな動きをしていた。

だが、ミスが多かった。

疲れやすいということが、大きな要因だったのかもしれない。

今の英は、自分の体力のなさを最小限の動きでカバーしているように見えた。

さらに周りの選手をうまく使う。

コンビネーションがうまくいかないときは、その選手が納得するまで詳しく説明した。

まさしく”司令塔”。

英の自信あふれる態度と、目を見張るプレーにチームメートは英を一目置くようになった。

それとともに、チームの実力は急上昇した。

これまでは格上と思っていたチームと試合をすると、互角以上に渡り合えるようになった。

サッカー部が生まれ変わったという噂を聞きつけ、練習試合を見に

くる緑丘中の生徒もしだいに増えて行った。

誰もが県西部地区対抗戦の日が来るのを、待ち望んだ。

「英、そろそろあがろうぜ。」

「ああ、和人、先に帰っててくれ。俺はもうちょっと桑田と練習するから。」

桑田は2年生で控えのディフェンダーだ。

その桑田に英は左サイドバックの練習をさせていた。

「ディフェンスの練習だったら、俺もつきあうよ。」

和人が言うと、英は少し顔をしかめて、

「いや、俺一人で十分だ。和人は早く帰って母さんの…。」

「母さんの、何だよ。」

「あ、ほら、おっぱいでもしゃぶってろよ。」

「だれがしゃぶるか、ばか。」

和人はムツとして部屋の方へ歩いて行こうとした。
すると英がすぐに走ってきた。

「すまん和人、冗談だよ。実はさ、昨日俺の母さんに聞いたんだよ。
お前の母さんが具合悪そうにしてたって。」

「えっ？」

「心当たりはないか？俺の母さん急いでたから話しかけれなかったらしいんだけど、とっても具合悪そうにしてたから、病院に行った方がいいんじゃないかって、昨日言ってたぞ。」

「そうか、あんまり気付かなかったけど、帰ったらお母さんに聞いてみるよ。」

「そうそう、そういうことで早く帰れよ。じゃあな。」

「あ、ああ、じゃあな。」

和人はちよつと首をひねって不審な表情をしたが、言われるままに帰って行った。

英は少しの間、和人の後ろ姿をじっと見ていた。

和人は家に着くと、クロベエの散歩に付き合った。

今日母の仕事は遅番ではなかったが、和人が散歩を買って出たのだ。

「助かるわ。毎日でも連れてっていいわよ。」

母はにこにこしながらリードを和人に手渡した。

和人はいつもどおり元気そうな母の顔を見ながら、英の母の話は取り越し苦労だったと思い安心した。

和人がクロベエの散歩を買って出たのは、月野さんとすれ違うかもしれないという期待からだった。

あの日以降、何度かクロベエと散歩したが、月野さんとは1度も会うことはなかった。

（月野さんが散歩コースを変えたんだろうか。それともあの日だけいつもと違うコースを来ていたのだろうか。）

和人は思い切って、散歩コースを変えてみた。

月野さんの家は知らなかったが、住んでいる地区は知っていたので、その地区に向かって歩き出した。

いつも散歩時間はだいたい30分、片道15分が目安だった。

だが、気がつくともう20分もたっていた。

そろそろ帰らないと、親が心配する。

月野さんに会えなかったのは残念だったが、和人は仕方なく来た道を引き返した。

すると50メートルほど前方に、一匹の犬が見えた。

太郎とかいう柴犬にとってもよく似ていた。

やがてその犬は、和人たちの方向に向かって吠えだした。

月野さんの姿は見えない。

別の犬だろうか、和人がそう思った時、月野さんがその犬に向かって走って来るのが見えた。

「太郎、太郎ってば、動かないで、そこにいるのよ。」

月野さんは和人たちに気づき、あわてて太郎の綱を捕まえた。そしてそのまま近くの家の門に入った。

和人たちがその門の前に近づいた時も、まだ太郎は吠えていた。太郎は犬小屋につなげられていた。

「こら太郎！吠えたらだめってば。」

月野さんは必死に太郎を叱った。

和人と月野さんの目が合った時、月野さんは、

「すみません、この犬ったら全然私の言うことをきかなくて。」と申し訳なさそうに言った。

和人は、

「いや、…。」

というのがやっとだった。

本当は、もっといろんな話をしたかった。

散歩は毎日しているのか、どの辺りを歩いているのか、犬は何歳になるのか、部活の後できつくないかなど、月野さんと会った時話す想像はしていた。

だが、いざ本人と向き合くと、緊張のあまりそれ以上の言葉がでてこなかった。

和人の顔は真っ赤になっていた。

すぐにいたたまれなくなつて立ち去ろうとすると門の標識が目に入つた。

そこには「月野」と書かれていた。

第12話

「今日、園山さんとお話ししたんだけどね。」

夕食を終え、居間でテレビを見ていた和人の父・正和に、母・由紀枝が話しかけた。

和人は自分の部屋に入っている。

「園山さんって、英君のお母さんかい。」

「そう、その園山さんよ。英君がね、近頃急に雰囲気が変わったんだって。」

「どんなふうによ？」

正和が少し関心を持ったのを確認し、由紀枝は正和の横に座った。そしてテレビの音量を少し小さくした。

「それがね、英君今までお父さん、お母さんって呼んでたのが、父さん、母さんって呼ぶようになったんだって。」

「それだけ？」

「他にもね、無邪気に何でも話してくれてたのが、急に口数が少なくなったり、アメリカの歌手のCDを聞いたりするようになったんだって。」

「へえ…、ま、そういう年ごろになってきたんだろうね。」

「まだあるのよ、家で勉強するようになったんですって。」

正和は、何を言ってるんだというふうに、

「勉強くらいするだろう、宿題も出るだろうし。」

「宿題じゃないのよ、高校受験用の勉強なの！」

由紀枝はほら、すごいでしょと言わんばかりに、身を乗り出してきた。

「…それがどうしたんだよ、いいことじゃないか。」

正和はますます取り合わない。

それならばというふうに、由紀枝は今度は声をひそめて話しだした。
「そしてね、あんまり話をしなくなった英君だけど、何故か私のことについて話したんだって。」

「君のことって何を？」

「和人がね、こう言ったっていうのよ。私が最近元気がないから病院に言って検査をしてほしいんだけど、聞いてくれないって。」

「へえ、そんなことがあったのか？」

「ないわよ。」

由紀枝は口を尖らせて言った。

「でね、だから英君、私が病院に行くように母さんからそれとなく説得してほしいって言ったらしいのよ。」

「ふーん、おかしい話だな。君、体調が悪かったの？」

「体調？…まあ、確かに少し気だるい感じがするんだけど、疲れがたまっているだけだわ。病院に行くほどのことじゃないのよ。」

正和はしばらく考えて、

「それで、和人にはそのこと聞いてみたのかい？」

「いいえ、まだ聞いてないの。聞いてみた方がいいかしら？」

「うーん、気になるんだったら聞いてみればいいさ。でもどうせ聞き間違いとか、何かの誤解だと思うよ。」

「そうね、英君も思春期で情緒不安定なのかもしれないわね。」

そこまで話すと由紀枝は立ち上がり、キッチンへ向かった。

「私が病気？…まさかね。」

由紀枝は小さな声でつぶやき、少し眉をひそめた。

そして気を取り直し食器を洗い始める。

正和もテレビの音量を大きくして、ゆっくりとくつろぎだした。

第13話

いよいよ1週間後に対抗戦が迫った。

組み合わせは既に決まっている。

緑丘中の1回戦の相手は、県大会ベスト4の葉山中　――　強豪だ。
しかしその後の組み合わせは悪くない。

1回戦さえ勝ち抜けば、決勝まで行ける可能性は十分にあった。

葉山中とはこの1年間対戦したことはなかった。

不安はあったが、葉山中にとっても緑丘中は未知の相手だ。

しかも近年良い成績を残していないので、もしかしたらなめてかかってくるかもしれない。

その心の隙について先制点をとれば十分に勝てるというのが、チームの共通した意見だった。

ディフェンスは和人を中心に安定していたので、練習の中心は攻撃だった。

ただ、英だけはその練習内容に不満を隠せずにいた。

確かにディフェンス力は高いレベルにある。

ディフェンダーはこの1年間不動のメンバーで、オフサイドトラップをかけるタイミングは絶妙だった。

しかし、その不動のメンバーの一人でも欠けたら、自慢の連携は崩れ去るだろう。

英の心配はそこだった。

そうならないためにも、誰が欠場しても大丈夫なように控えのメンバーを入れて練習しておくべきだと、顧問の楠田に何度か進言した。だが楠田は、それを否定しないものの練習内容を変えようとはしなかった。

英の急激な”進化”で攻撃の幅が格段に広がったため、攻撃の練習

に重点を置くようになっていた。

仕方なく英は練習時間の前と後に、毎日少しずつディフェンスの練習を桑田にさせた。

オフサイドトラップのタイミングは実戦で覚えていくしかないため、対抗戦では使うことはできない。

マークの仕方、他の選手のフォローなど基本的な練習の繰り返しだった。

「へえ、かなりサマになってきたじゃないか、桑田。」

いつものように部活の後に英と特訓していた桑田に向かって、着替えを終えた和人が声をかけた。

「そうですか？ 橘さんに言われると自信がつかないなあ。」

「俺だって同じことを最近言ってるぞ。俺の言葉はあてにならないえってことか？」

英が桑田をにらんだ。

「そんなことはないです。ただ、橘さんはディフェンスの要だから、その…。」

「わかってるって、冗談だよ。まじめなところは和人にそっくりだな。」

英が桑田の頭をぼんと叩いて、笑いながら言った。

「でも英、その左サイドバックは澤田のポジションだぞ。頑丈な澤田がけがをするってのはほとんど考えられないけどな。」

「引っ込むのは澤田とは限らないさ。和人がけがをするかもしれない。そうすると和人のところに澤田が入って、澤田のところに桑田が入るってわけだ。」

「ふうん、何だか英って監督みたいになってきたなあ。前はそんなこと考えもしなかったくせに。」

「…おれも成長してるってことよ。よし桑田、今日はここまでだ。」

英が制服に着替えるのを待っていると、前川徹也が部室の前を通りかかった。

「毎日毎日よく練習なんかやってられるな。汗臭いぞ和人。」

「お前こそこんな時間まで何やってたんだよ。」

「俺か？俺は図書室でお勉強だ。」

「なんだ、マンガか。もったいないな、徹也の運動神経なら何やつでもすぐレギュラーになれるのに。」

「スポーツは好きだよ、特に球技は。でも過酷な練習は俺には向いてない。ところでどうだよサッカー部の調子は。」

「うわさは聞いているだろ？葉山中にだって勝ちそうな勢いだ。」

「英がすごいんだってな。聞いたか？あいつこの前の実力テスト、1教科も赤点がないんだぜ。あの英がだぞ。」

ごほん、という声がして徹也が振り向くと、そこには英がサッカーボールを持って立っていた。

「あの英がどうしたって？赤点がないくらいで騒ぐなよ。おれは西城に行くつもりだからな。」

「…」

和人と徹也があっけにとられた。

「西城だって？お前自分のことわかってるのか？お前は園山英だぞ。学年で成績ワースト1の！」

徹也が大きな声を出した。

西城とは県立西城高校のことで、県内でも学力がベスト10に入る進学校だ。

英の今の学力では、まず合格することはできない。

「まあ見てろって。」

英が自信満々で言うと、徹也が、

「和人、騙されるなよ。そんな無謀なことするわけないじゃないか。他の誰が西城を受かって英だけは受かんねえんだから。」

と、ニヤニヤしながら和人に言った。

だが、和人はそうは思っていなかった。

（おそらく英は本当に西城に合格する。）

根拠は全くなかったが、なんとなく和人はそう思いはじめていた。

第14話

それは対抗戦初戦の1日前の出来事だった。

授業がすべて終わった後、和人たちサッカー部は軽めの練習を行っていた。

軽く汗をかくことと、これまでやってきたコンビネーションや、ポジショニングを確認することがその日の狙いだった。

30分ほど過ぎたとき、教頭先生が血相を変えてグラウンドに走ってきた。

「楠田先生、ちょっと。」

言いながら顧問の楠田の方へ寄って行き、何やら話しかけた。すると、楠田は大きな声で和人を呼んだ。

「橘、こっちへ来い！」

「はい。」

和人が近付くと楠田は言った。

「教頭先生と一緒に、すぐに滝川病院へ行け。お母さんが意識不明の重体だそうだ。」

「えっ…」

「急いで着替えてこい。気をしっかり持つんだぞ。」

「は、はい。」

和人は部室へと走って行き、すぐに着替えて教頭先生と駐車場の方へ行った。

楠田はサッカー部員を集めた。

「実は、橘のお母さんが倒れて病院に運ばれた。病名とかはつきりしたことはわからないが、意識不明の重体だそうだ。私もこれから病院へ行ってみる。」

部員は誰も口を開かず楠田の話を神妙に聞いていた。

「明日の試合だが、おそらく橘は出られないだろう。橘のポジション、スリーパーの位置には澤田が入れ。左サイドバックは。」
「先生、そこには桑田がいいと思います。この半月ずっとそのポジションを練習してきましたから。」

英が進言すると、

「そうか、じゃとりあえずそれでいこう。明日の集合時間はわかっているな、校門前に8時だ。清水、後の練習は任せたぞ。」

そう言うのと楠田も駐車場の方へ走って行った。

「橘先輩が出れないのはやばいですよね。」

2年の松永が切り出した。

「いや、まだ出られないと決まったわけじゃない。お母さんの意識が戻るかもしれないしな。」

と清水。

「仮に意識が戻ったとしても、出られないと思う。清水、桑田を入れてちょっとディフェンスの練習を試みようぜ。」

英がそう言うと、

「冷たいなあ英、お前と和人は親友だろ？」

「親友だけど、どうにもならないじゃないか。それとも試合を欠場するか？」

「欠場するわけないだろ、こんなに練習したのに。わかったよ、まあ最悪のことも想定しないとな。よし桑田を入れて練習するぞ。」

それから1時間ほどディフェンス中心の練習が行われた。

桑田の動きには、誰もが目をみはった。

実に危なげない動きで、ほとんどミスがなかった。

「すごいじゃないか桑田、これなら十分いけるぞ。」

清水が太鼓判を押した。

「だが、自慢のオフサイドトラップは封印だ。こればかりは練習できなかった。だから明日の試合はたぶん相手に押し込まれる場面

が多いと思うんだ。そこを耐えてカウンターで一気に攻める。少ないチャンスを確実に決めなければならぬから、清水、お前の出来が大きく試合を左右するぞ。」

英が言った。

「任せとけて。ディフェンスの裏を突くのは自信があるんだ。あとは英や松永が俺にドンピシャのラストパスを出せばいいんだ。」
清水は自信満々だ。

「そのラストパスが難しいんですけどね」

松永が困ったような顔をして言うともみんなが笑った。

「よし、今日はここまで。体操して終わろう。」

こうしてその日の練習は終了した。

第15話

教頭先生の運転する車が滝川病院に着いた。

「救急車で運ばれた橘さんはどこにいるんでしょうか。」

教頭先生は受付にまっすぐ走り、すぐに尋ねた。

「ご家族の方でしょうか、こちらへどうぞ。」

受付の女性が和人たちを急ぎ足で案内してくれた。

手術中 ― という文字がドアの上で光っている。

和人の父がドアの前のソファ―に座っていた。

「和人、早かったな。お母さんは今、手術中だ。」

父は立ち上がってそう言った後、ふうーとため息をついた。

「私は、教頭の中山です。どうですか、奥様の容体は？」

教頭先生が頭を下げた。

「教頭先生ですか、ありがとうございます。先ほど看護婦さんに伺ったのですが、家内はどうも脳出血のようです。・・・もともと血圧が高い方だったのですが、まさかこんなことになるなんて・・・」

「脳出血、ですか。」

「ええ、だからもし助かったとしても、何らかの障害が残る可能性があると言っていました。」

「障害って？」

和人が尋ねた。

「例えば言語障害とか、半身不随とか、・・・脳死とか。」
父は和人の目を見つめて続けた。

「和人、そういうことはな、和人、覚悟しておかねばならないんだよ。」

「・・・。」

和人は父の説明を他人事のように聞いていた。
全く実感がわかなかった。

今日の朝家を出るまで、いつもと同じ母だった。

その母が、突然倒れた。

そして今、意識不明の重体となって生きるか死ぬかの大手術をしているという。

和人には母が死んだり、重度の障害を持ったりするなんて全く考えられなかった。

やがて楠田が駆け付けた。

隣町に住んでいる叔母（お母さんの姉）夫婦もやってきた。

他の親戚の家は遠いので、すぐには駆け付けられない。

そして3時間がたち、時刻が午後9時を過ぎたころ、「手術中」のライトが消えた。

すぐにドアが開き、医師が出てきた。

医師は少しうつむいていた。

父も叔母も何も言わず、医師の言葉を待った。

「残念ですが…」

医師のその一言を聞くや否や、叔母が口を抑えおおう、と声を上げた。

「最善は尽くしました。ですが、病院に運ばれた時すでに、かなり危険な状態でした。病名は、看護婦から聞いていると思いますが、脳出血です。……どうぞ、中へお入りください。」

父がふらふらと手術室へ入った。

続いて叔母が大声で泣きながら、叔父にもたれかかるようにして入った。

和人は……やはり信じられなかった。

あまりにあっけない母の最期。

和人の表情を読み取った楠田は、和人の肩に手を回し、手術室へいざなった。

手術室へ入ると、叔母が母の遺体の前で泣き崩れていた。

父は母の髪を撫でながら静かに立っていた。

母の顔は、まるで眠っているかのようだ。

楠田が和人の右手をつかみ、両手を組んでいる母の手の上に乗せた。母の手は温かくはなかったが、冷たくもなかった。

和人は両手で母の手を覆った。

涙は不思議と流れなかった。

取り乱すこともなかった。

母が死んだのに、涙一つ流さない自分は薄情なのだろうかと思っただ。

しばらくすると、叔父は母が死んだことを親戚に知らせるために、公衆電話へと向かった。

叔母は部屋の外のソファに座り、いつまでも泣いていた。

父が楠田にお礼を言い、楠田は帰った。

それから父は和人に、

「お父さんは少し外の空気を吸ってくる。」

と言い、玄関の方へ歩いて行った。

やがて、父と入れ替わるようにして、叔父が戻ってきた。

叔父は缶コーヒーを4本買ってきていて、1本を和人に手渡した。

和人はそのコーヒーをすぐに飲み干し、空き缶入れがある玄関の方へ向かった。

空き缶を捨てようとした瞬間、和人の動きが止まった。

和人の耳に、父の鳴咽が聞こえてきたのだ。

父の姿は見えなかったが、父が玄関の外で口を押さえながら泣いて

いるのがわかった。

その声を聞くうちに、不意に和人の胸が熱くなった。

和人はその場を離れ、トイレへと駆け込んだ。

トイレのドアを閉めたとたんに、涙がどつとあふれ、嗚咽がこみ上げてきた。

ペーパータオルで口を押さえながら、和人は思う存分に泣いた。

第16話

翌朝早く、母の遺体は病院から10キロほど離れた葬斎場へ移された。

そして午前7時頃には、祖父母（母の両親）と叔父（母の弟）が関西からいち早く駆け付けた。

叔父が運転する車で夜中に出発して、やっと着いたのだ。

和人は祖父母が遺体の前で泣き崩れたので、また自分も泣き出しそうになった。

いつも優しすぎるほど優しい祖父母の悲しむ姿は、和人の胸を打った。

それから徐々に人が集まってきた。

人が集まると、和人の気持もいくらかまぎれた。

だが、昨夜は一睡もしていなかったので、だんだん頭がボーとした。

その和人の様子に気づいたかのように、叔父が

「和人は全く眠ってへんのやろ。隣の部屋は休憩室やからちよっと休んどき。兄さんも休んだ方がええで、先はまだ長いよって。」

と言ってくれた。

父は、自分はまだ大丈夫だからと断ったが、和人には休むように言った。

和人は素直に従い、隣の部屋に行き、やがて深い眠りについた。

「監督、橘先輩のお母さんは大丈夫ですか？」

楠田の姿が見えるなり、2年生の松永が尋ねた。

「おっ、さすがに松永は早いな。他の部員はまだ来ていないか。」
集合時間の20分前だった。

松永は2年生ながら3年生を手玉にするほどのテクニシャンだ。でも実力を鼻にかけるような嫌味がない。

むしろあまり目立ちたがらず、チームを陰で支えるような謙虚なタイプだった。

いつも集合時間には1番に来ていた。

「残念だが、昨晚亡くなった。かわいそうに、橘はものすごくショックだろうな。」

「そうですか……。」

松永は和人の母が容体を回復し、和人がゲームに出られるのではないかと期待していたので、落胆の色を見せた。

その後徐々に部員たちが集まって来たが、皆同じ気持ちだった。

一様に和人の母の容体を尋ね、結果を聞くと顔を曇らせた。

「よし、そろったな。バスに乗り込め。」

楠田の号令でバスに乗り込み、一同は試合会場へと向かった。

「皆聞きなさい。」

試合前に部員全員を集め、楠田が言った。

「今日の試合に負けたら、そこで3年生は引退だ。でも勝てば次の試合がある。確かに葉山中は強敵だ。だが全員が持てる力をすべて出せば勝つ可能性は十分にある。この1回戦、必ず取るぞ。」

「はい！」

全員が声を上げた。

「監督、和人は2回戦に出れますか。」

ふいに英が尋ねた。

「来週はまだ無理だろう。出れるとしたら3回戦からだ。本人の気持ち次第だ。なにしろ今まで体験したことのない大きな出来事だからな。」

少しの時間、皆が黙りこくった。

「みんな……」

清水が意を決して声を発した。

「今日の試合と2回戦、必ず勝とう。」

皆がいつせいに清水を見つめた。

清水は全員の顔を見渡し、続けた。

「そして和人を・・・、和人を迎えに行くぞ。」

「おう！」

氣勢をあげて、選手がグラウンドに飛び出した。

第17話

3年生の部員が制服を着て学校に集まってきた。

和人の母の葬式へ向かうためだ。

葬斎場は学校からは少し遠かったが、顧問の楠田がワゴン車で連れて行ってくれることになっていた。

「おっ、みんな揃っているな。」

楠田は部員より少し遅れてやってきた。

すぐに3年生6人と楠田は車に乗り、葬斎場へと向かった。

「なあ、線香のあげ方って知ってるか？」

「いや、たしか線香じゃなくて粉みたいなのをおでこにつけて燃やすんじゃないか？」

「どうしよう、俺やり方わかんねえよ。」

「俺もだよ、とりあえず俺一番最後な。」

車の中で、部員たちはずっとしゃべりっぱなしだった。

だが、英だけは一言も口をきかず、ずっと窓の外を眺めていた。

和人の母親を知っているのは英だけだったし、英と和人が親友だということとは当然知っていたので、だれも英に気を使い話しかけることはしなかった。

15分ほどで車は着いた。

皆車から降り、神秘的な顔つきで楠田を先頭に葬斎場へ入った。

受付で名前を書き奥へ進むと、祭壇の前の親族席に座っていた和人が気づいたらしく、楠田に会釈をした。

楠田も会釈を返し、後ろの方の席へ部員と一緒に座った。

葬式は1時間ほどかった。

それが済むと次は親族が遺体とともに火葬場へと向かう。

すると葬斎場が用意したバスへ乗り込もうとする和人に、英が寄って来た。

「和人、・・・ごめんな。」

英がいきなり謝りだしたので、和人は驚いた。

「ごめんなって、何をだよ。」

「いや、その・・・、とにかく早く元気になってくれ。」

英はそう言うと、慌てて仲間のところへ戻って行った。

和人は英が何を言いたかったのか考えた。

そして、昨日の試合の結果が悪かったのだという答えを導き出した。
(そうか、負けたのか。中学校での俺たちのサッカーは終わったんだな。)

和人はそう思いながら、楠田や部員達に礼をしてバスに乗り込んだ。

「いけね、昨日の試合のこと和人に言いそびれた。」

清水の声で、皆がはっとした。

「そうだった、見事な勝利を報告するつもりだったのに。」

「グラウンドで待ってるってこともな。」

走り去っていくバスを見ながら誰もが残念がった。

葉山中は思っていた通り強かった。

序盤から葉山中のフォワードが、緑丘中のゴール前に何度も攻め込んできた。

だが、緑丘中は少しポジションを下げ気味にし、決定的チャンスを与えなかった。

押せ押せムードの葉山中は、ディフェンダーも次々に攻撃に参加しだした。

(いいぞ、もっと攻めてこい。カウンターの餌食にしてやる。)

英はじっと味方のチャンスが来るのを待っていた。

そしてその時がきた。

前半23分、葉山中のディフェンダーがオーバーラップをして自陣に攻め込んできた。

澤田と桑田が体を張って止めに行く。

ボールを奪い返した瞬間、英から声がかかった。

「桑田、こっちにパスだ。」

桑田がパスを出して、英が受け取った。

英からすぐに攻め上がった松永にパス。

松永は逆サイドの敵ディフェンダーの裏にふわっとしたボールを蹴りこむ。

清水が驚異的なスピードで飛び出しワントラップ、前に出てきたキーパーをかわし、ゴールを決めた。

見事なカウンター攻撃だった。

葉山中は前半のうちに何とか同点にしようと、さらに攻撃を厚くしてきたが、緑丘中の選手たちは、清水以外下げ気味のディフェンスに徹し、なんとかしのいでいた。

そして前半終了間際、葉山中のコーナーキック。

緑丘中はヘディングに強い清水をゴール前に置き、全員ディフェンスの態勢をとった。

誰の目にも緑丘中が前半を1点リードで終了しようと思っているように見えた。

「松永、俺はディフェンスしないぞ。」

「えっ？」

英が松永に耳打ちした。

「俺はこっそり前線に移動する。味方がボールを奪ったらおれの前にボールを蹴りだすように指示してくれ。」

「わかりました。」

英の意図を読み取った松永が、にっこり笑った。

コーナーキックのボールがゴール前に飛んできた。

清水がマークする長身のフォワードに合わせているようだ。

清水が競る。

だが一瞬早く相手の頭がボールを捕らえた。

ボールはワンバウンドしてゴールの左隅へ。

ゴールの左端にいた澤田が反応よく足を延ばす。

ボールはその足に当たり密集している選手たちの頭を越えた。

そのルーズボールに最初に追いついたのは松永だった。

松永はダイレクトにボールを大きく蹴りだす。

英と一人の相手ディフェンダーが追った。

ボールは緑丘中から見て中央よりかなり右に、センターラインから葉山中側コートへ10メートル程の地点に落ちた。

先に追いついたのは英だった。

相手ディフェンダーが行く手を阻む。

1対1。

英がドリブルしながらフェイントをかける。

ボールをまたぐ、1回、2回。

そして和人を抜いた時のフェイント。

次の瞬間、相手ディフェンダーは置き去りにされていた。

独走だった。

キーパーがシュートコースを狭めようと英の方へ飛び出す。

英は冷静にループシュート、ボールは無人のゴールへと吸い込まれた。

そしてここで前半終了のホイッスルが鳴った。

「よく走ったな、英。」

仰向けに倒れ込んで荒い息をついている英に、清水が寄ってきて声をかけた。

「ハーフタイムになって助かったぜ。きついなのって。」

「肩貸そうか、ベンチで監督が待ってる。」

「いいよ、怪我したわけでもないのに。」
英がにっこり微笑んでゆっくりと立ち上がった。

第18話

「みんないいぞ、その調子だ！」

楠田が興奮しながら選手を迎えた。

「園山、見事なカウンター攻撃だったな。まさに『してやったり』という感じだな。」

「でも監督、相手は攻め方を変えてきます。たぶんカウンターはもう使えません。」

言いながら英はグラウンドに寝そべった。

「なあに、相手は2点を取り返しに遮二無二攻めてくるさ。カウンターはさらに有効だ。」

楠田はそう言ったきり、戦術について何も語らなかった。

「園山先輩は、葉山中がどういう攻めをしてくると思いますか。」

松永が小声で聞いてきた。

「さあな、攻め方はわからねえが、俺のマークはきつくなるだろうな。」

「大丈夫ですか？かなり疲れているようですけど。」

「まあ、なんとか持つさ。後半、松永には俺の分まで動いてもらうことになるだろうけどな。」

「俺は大丈夫です。どんどん使ってください。」

「頼りにしてるぜ、後輩。」

英はそう言うと、目を閉じ、時間いっぱいまで休んだ。

ピーッ。後半開始の笛が鳴った。

葉山中はバックラインを前半よりもかなり下げてきた。

明らかにカウンターを警戒した守りだ。

さらに案の定、英には葉山中ミッドフィルダーがガチガチのマンマーク。

実力に勝る葉山中は、緑丘中の攻撃の糸口を切り、確実に勝つ作戦を選んできた。

（ちっ、やはりその手で来たか。）

英は思い切った作戦に出ることにした。

「松永、トップ下に入ってくれ。俺はボランチだ。」

「はい。」

（なるほど守りを強化して、勝負どころで相手のマークを振り切って反撃に転じるということか。ミニゲームの時の戦法だな。）

松永は英の考えをすぐに理解した。

英がディフェンスに回ったことで、葉山中の攻撃がいくぶん鈍った。しかし緑丘中については相手に得点を許してしまった。

桑田の守備力が弱いことを知り、そこをついてきたのだ。

サイドライン際をドリブルしてきた相手のフォワードが、桑田を振り切り鋭いセンタリングを上げた。

ボールは長身のセンターフォワードにドンピシャだった。

キーパーは一步も動けず、ゴール右隅に決められた。

（ちくしょう、ついに1点入れられたか。それも後半が始まって10分も経っていないというのに……）

英は中腰になり荒い息をついていた。

（でもここで守りに入ったら、一気にたたみかけられてしまう。ここは勝負だ！）

だが、キックオフのボールを受けた英は、味方にパスをすると、後方に下がってしまった。

「園山、なに下がっているんだ。ここは攻める時だろ。」

楠田が怒鳴る。

その時、葉山中が味方のボールをパスカットした。

そしてまた桑田がいる方のサイドから攻めてきた。

ディフェンスの選手がライン際を駆け上がり、パスを受ける。

桑田が振り切られた。

だが、桑田が抜かれた瞬間、桑田の後ろから英が現れ、ボールを奪った。

「松永！」

英はそう叫んだ後、敵を一人かわし猛然と走りだした。

相手の選手が3人くらい詰めてきたが、近づいてきた松永にパスを出した。

松永はダイレクトで英に壁パス。

さらにパスを受けた英はゴールへ向かって突き進んだ。

松永はいつでもパスを受けられるように英の右側を走っていた。

清水が前線で相手ディフェンスをかき回す。

ボールはハーフラインを5メートル程超えた。

（まだ、清水にはパスが通らない。もう少しゴールに近づかないと……。）

「逆サイドにパスだ！」

松永にパスしながら英が叫んだ。

チーム一の俊足、ウイングの持田がライン際を走っていた。

松永がパスをだす。

「松永フォローに行ってくれ。清水ニアサイドだ。」

そう言いながら英は持田の逆サイドへと走った。

清水がニアサイドに走りこむ。

持田からパスを受けた松永がセンタリングを上げた。

そのボールは清水の頭の上を越えて、フリーの英へ。

胸でワントラップしてシュート。

ボールはサイドネットに突き刺さった。

この1点が葉山中の反撃ムードを一変した。

葉山中は、焦りからミスを連発し、緑丘中に攻め込まれる場面が多くなった。

そして葉山中が意地の1点を取り返したところでゲームが終了した。
「やられたよ。」

葉山中の長身フォワードが英に話しかけてきた。

「お前、園山っていうのか。お前みたいな選手がいるなんて知らなかったぞ。なんで県代表に選ばれなかったんだ。」

「さあ、そんなこと知らねえよ。」

「なあ園山、俺北高に行くんだけど、お前も行くんだろ？」

北高はサッカーの名門で、6年連続全国大会に出場している。

「いや、俺は西城に行く。」

「西城？…そうか、お前頭いいんだな。」

「頭はよくないけど、西城に行かなきゃならないんだ。西城に行つて北高を倒す。」

「わかった、じゃあ敵だな。高校では負けないぞ。」

「ああ、よろしくな。太刀中舜君。」
たちなか しゅん

英は太刀中に背を向けて、味方のベンチに歩いて行った。

（俺の名前、何で知ってるんだ？）

太刀中は不思議そうに英の後ろ姿を見ていた。

第19話

月野さんの家の前を通ると、いつものように太郎が吠え始めた。

「おい太郎、いい加減に俺たちがあやしくないって気づけよな。」

太郎を見下ろしながら、和人はあきれたように話しかけた。

それでもますます吠え方はひどくなるばかりなので、和人とクロベエは足早にそこを遠ざかった。

和人の母が死んで6日目だった。

クロベエとの散歩が和人の唯一の仕事だった。

その日一人と一匹は、いつもより遠出して景色のよい川原へ向かった。

ちょうど学校の授業が終わり、生徒たちが帰る時間だったが、その場所なら生徒たちと出会うことはまずなかった。

和人はクロベエのリードを外し、川原の草むらに寝転がった。

空が透き通るほど青く、気持ちの良い風が吹いていた。

クロベエは川原を走り回ったり、川へ入ったりして楽しんだ。

和人は目を閉じて、体中の力を抜いた。

それから20分ほどした時、遠くから犬の吠える声が聞こえた。

（ん？この声は…）

和人が体を起こしその声の方を向くと、月野と太郎の姿が見えた。

すぐにクロベエが和人の方に走り寄ってきた。

月野は和人に気づくと不思議そうに首をかしげた。

「あの、サッカー部は…」

月野が和人に話しかけてきたが、太郎が例のようにけたたましく吠えるので、

「すみません。」

と謝り10メートルほど引き返して、太郎を道のそばの木につない

で戻ってきた。

和人は月野さんが話しかけてくるとは夢にも思っていなかったので、ときどきしながら見ていた。

「すみません、臆病な犬で誰にでもすぐ吠えて困っているんです。その犬のようにお利口になってくれるといいんですけど。」

和人に近づきながら、月野がほほ笑んだ。

和人は自分の顔が真っ赤になっていることに気づき、うつむいた。

「あの、サッカー部は1回戦勝ったって聞いたんですけど、今日は練習なかったんですか。」

「えっ？」

「先輩、サッカー部辞めてないですよ。」

「え、ああ辞めてはいないけど…、この前うちの母親が死んじゃったもんだから…」

月野ははっとして、

「すみません。そんなことは知らずに…」

と言葉に詰まった。

「いや、いいんだ、気にしないで。でも、サッカー部が1回戦勝っていたなんて知らなかったな。」

和人はなるべく目を合わせないようにしてしゃべっていた。

「松永君がクラス中に自慢していましたよ。このまま優勝しちゃうんじゃないかって。」

「へえ、松永と同じクラスなのか。でも、つ、月野さんたちの女子バスケットは…」

「はい、私が今ここにいてことは、負けちゃったってことです。」

月野の左ほほにえくぼができた。

「でも惜しかったんですよ、1点差なんですから。悔しくて悔しくて…。絶対に来年はリベンジしてみせます。」

こぶしを握りしめてそう言うのと、月野は太郎の方へ歩きだした。

2・3歩歩いたところで月野が振り返った。

「サッカー部、勝ち進んでくださいね。男子バスケの試合と重ならなかったら応援に行きますから。」

月野はにっこり笑って軽く会釈をし、太郎と歩いて行った。和人はその後ろ姿をずっと見ていた。

月野の方から話しかけてきた。

それなりに会話もできた。

夢のようだった。

体が緊張してガチガチになっていた。

「クロベエ、帰ろうか。」

そう言って和人は大きく背伸びをした。

なんだか久しぶりに力が湧いてくるような感じがした。

第20話

和人はその次の週から学校へ行った。

1時間目が終わりに休み時間になると、3年生のサッカー部員が和人のもとにやってきた。

「驚くなよサッカー部は1回戦の葉山中を3対2で破ったんだぜ！」

「それだけじゃねえぞ、昨日の2回戦は守屋中に4対1で勝ったんだ。」

「次の試合は高浜中だ。あそこも攻めのチームだけどオフサイドトラップが使えればたぶん楽勝だな。」

皆が矢継ぎ早に話した後、英が口を開いた。

「待ってたぞ、和人。」

「サンキュー、でも1回戦で負けたとばかり思っていたよ、英があの時『ごめん』で言ったから。」

「ああ・・・あの『ごめん』は何ていうか・・・その、別の『ごめん』だ。」

「何言ってるんだよ、とにかく和人、今日から練習に出れるんだろ？」

清水が割って入ると、英がほっとした顔をした。

「うん、そのつもりだけど、ちょっと運動不足だからきついだろうな。」

「なあに、もともと和人の運動量はチーム1なんだから、みんなと同レベルの動きに落とせば問題ないさ。」

「そうそう、俺たちの運動量なんて、和人の7割くらいしかないんだから。」

「そう考えれば和人はバケモンだな、今日だけは普通の人間でいてくれよ。」

皆の言葉は優しかった。

（自分にはこんなに優しい仲間がいる。）

和人はとても幸せな気持ちになった。

「じゃあな和人、部活であおうぜ。」

清水が言った。

「ああ、後で。」

皆を見送りながら和人がほほ笑んだ。

放課後の部活では、和人は久しぶりに気持ちのいい汗をかいだ。

「なあ英、もうちょっと遊ばないか。」

練習後に和人が言うのと、

「へえ、めずらしいな、和人から誘うなんて。もちろんつきあうぜ。」

辺りは少し暗くなって来ていたが、二人は30分ほどリフティングや1対1をして楽しんだ。

帰り道で和人が言った。

「お父さんがさ、とっても落ち込んでるんだ。本人はそのことを俺に悟られまいと妙に明るくふるまうんだけど、それがまた見てられなくってさ。」

「そうだろうな、とっても仲良しだったからな和人の父さんと母さん。ところで飯はどうしてるんだ？」

「朝はトースト、夜はお父さんが料理の本買ったりして頑張ってるけど、失敗ばかりだな。昼の給食がとってもありがたいよ。」

「そんな事だろうと思った。うちの母さんがさ、今度の土曜日に和人を連れて来いって言うんだ。昼飯をごちそうするってよ。」

「サンキュー、そうだなお言葉に甘えて久しぶりにお前んちに行くとするか。」

「そうしろよ。なんなら晩飯まで食っていくか？」

「いいねえ。そのまま泊まり込んだりしてな。」

二人は顔を見合せて笑った。

「でも・・・。」

急に和人が真顔になって切りだした。

「本当にサッカー部が勝ち抜いててくれて助かったよ。今の俺にサッカーがなかったらほとんど廃人状態だったかもしれない。」

「そうさ、みんな和人が戻ってくるまで負けないって、そりゃあ気合が入りまくってたんだから。」

「・・・決めたよ。」

「何を？」

「俺、高校に行ってもサッカー部に入る。」

「ふうん、俺と同じだな。で、どこの高校に行くんだ？やっぱり修学館か？」

修学館高校は、電車で20分の場所にある県内でも有数の進学校だ。
「前はそう思っていたけど、うちのお父さんどうやら来年転勤らしいんだ。どこの学校に赴任するかわからないから、家の近くの高校を選ぶってことはできないしな。」

「だから？」

「サッカー部が強くなって寮があってそこそこのいい学校にしようと思っている。」

「まさか・・・」

「そう西城高校だ。徹也も受験するって言ってたし、英も行くんだろ？」

「そのつもりだけど・・・、俺の場合はどんなに良くても合格ラインぎりぎりのはずだから、ライバルは一人でも少ない方が・・・。」

「その分勉強教えてやるから、そんな冷たいこと言うなよ。」

和人が英の背中を叩いて笑うと、

「ちえっ、仕方ないな。でも俺がもし西城を落ちたら責任とってもらうからな。」

英も和人を睨んで笑い返した。

第21話

日曜日の朝がきた。

今日の試合に勝てば、ついに決勝進出だ。

この県西部地区対抗戦での緑丘中の成績は、今のところ上出来と言
ってよかった。

バスケット男子、卓球男子、卓球女子、それにサッカー部がベスト
4に勝ち進んでおり、その他の種目ではバレー女子がベスト8にな
っていた。

各競技での採点は優勝20点、準優勝15点、3位13点、4位1
1点、5位〜8位8点となっており、緑丘中は現時点で52点とな
る。

これは参加18校中、堂々3位の成績だった。

1位は県内随一のマンモス校、奥山中の60点で、2位浜里中55
点、4位川原中49点と続く。

「高浜中は県大会予選で負けた相手だな。みんなあの時の悔しさを
思い出せ。うちのチームは確かに強くなっている。だが、向こうも
さらに強くなっているに違いない。おそらく力は五分と五分。実力
が拮抗した試合でものをいうのは何だと思う？」

楠田の問いに選手全員が顔を見合わせた。

「それは絶対に勝つ、という強い思いだ。」

楠田はグラウンドの周りを見渡したあと続けた。

「今日は応援もいっぱい来てくれてるぞ。応援に来てくれたみん
なのためにも、今日は絶対に勝つ。いいか！」

「はい！」

総合優勝の可能性が強まってきたということで、グラウンドの周り
は緑丘中の生徒が大勢応援に来ていた。

高浜中の応援の2倍以上だった。

「先制点をとって相手をビビらせようぜ。」

円陣を組んですぐに清水が言った。

「いいですね。高浜はうちが強くなったことを知らないんじゃないですか。」

「松永、俺たちは1回戦で葉山中に勝ったんだから、高浜はきつと警戒してくるぞ。攻めるのはいいが、ディフェンスもしっかり頼むぜ。」

英がくぎを刺した。

「緊張感のない顔だな、和人。」

清水が少しにやけている和人を冷やかした。

「だって仕方ないだろ、全然負ける気がしないんだから。みんなもそう思わないか。」

皆が顔を見合せて笑った。

「確かにな。じゃあサクッと勝って決勝へ進もうぜ！」

「おう！」

清水の掛け声に呼応し、選手がグラウンドに散った。

キックオフ直後に高浜中の度肝を抜くプレーが起きた。

清水がキックオフのボールを松永へパスし、松永は後方の英にボールを戻す。

そして英は、何と、――シュートした。

ボールは清水の頭上を越えて相手ゴールへ。

前に出ていた相手のキーパーが慌ててゴールの方へ下がる。だが、間に合わなかった。

ボールはゴールのほぼ中央上部に見事に突き刺さった。

両手を突き上げた英に、和人が駆け寄ってハイタッチ。

他のチームメイトが次々に英に飛びついてきた。

グラウンドの周りを取り囲む応援団が大きな歓声を上げた。

開始5秒の出来事だった。

「ちくしょう、涼しい顔をして狙ってやがったのか？」

清水が英の背中をポンと叩いた。

「たまたまキーパーが出ていたからとつさにシュートしたんだ。最初はサイドにはたこうと思っていたんだぜ。」

「何が『ディフェンスもしっかり頼むぜ』ですか。自分は攻める気満々じゃないですか！」

松永が冷やかす。

興奮が冷めないまま、相手のキックオフが始まった。

英はふと和人の方を振り向いた。

すると和人が右手を軽く上げた。

（まかせとけて、ディフェンスは手を抜かないよ。）

英が頷いた。

ゲームは終始緑丘中のペースだった。

緑丘中は前半終了間際に1点、後半にも1点を入れ、3対0で高浜中を下した。

「松永、こんなところにいたのか、監督が探していたぞ。」

ゲーム終了後、和人は、水道の水で右足を冷やしている松永を見つけた。

「はい、すぐに行きます。」

「お前足をどうかしたのか？」

「ちょっと足首を捻挫したみたいです。でも大したことないと思います。」

「そうか、ひどいようだったら監督に言うんだぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

和人と松永はみんなのところへ歩き出した。

松永はほんの少しびっこをひいていた。

第22話

試合後の月曜日の朝、緑丘中はざわついていた。

バスケット男子は惜しくも敗れたものの、卓球男女と和人たちサッカー部が決勝にコマを進めたのだ。

現時点での成績は1位奥山中68点、2位緑丘中64点、3位浜里中59点、4位川原中57点と続き5位以下は50点を下回る。

卓球女子とサッカー部の相手は奥山中で、卓球男子の相手は浜里中だ。

つまり緑丘中の残った3チームが優勝すれば、総合優勝の可能性は極めて高いと言える。

昼休み時間に和人と英が話をしていると、バスケット男子のキャプテン鶴田が二人に話しかけてきた。

「よう、橘に園山、プレッシャーに押しつぶされそうになってるんじゃないか？お前たちサッカー部には優勝してもらわないと、何しろ20年ぶりの総合優勝がかかってるんだからな。」

「これはこれは、誰かと思ったら、残り5分でファイブファールをして相手に逆転を許したバスケット部の鶴田君じゃありませんか。」英がからかうと、和人が吹き出した。

「な、なんでそんなことまで知ってるんだ？というよりあれはミスジャッジだからな。本当なら俺たちが決勝に進出したはずなんだ。」実直な鶴田が少しむきになって言った。

「何がプレッシャーに押しつぶされそうだよ、お前たちバスケ部が勝ってりゃ俺たちの負担はぐっと減ってたのにさ。責任とれよな。」今度は和人が攻撃した。

「ぐっ…、それを言われると…、申し訳ない。」

素直に謝る鶴田をはさんで、和人たちは大笑いした。

「決勝戦は応援に行くから頑張れよ。」

手をあげて去っていかうとする鶴田に英がダメを押した。

「まだわかってないな。行かせてもらいます、だろ？」

鶴田が振り向き、英にあっかんべーをした。

その日の練習は休みだった。

サッカー部の部室では、和人と英、それに前川徹也がいた。

「暇だなく、そうだボウリングでもやらないか？」

「おっ、それもいいかもね。」

徹也の提案に英が乗ったが、和人はべもなく断った。

「クロベエを散歩に連れて行かなきゃならないから。」

「あのバカ犬か。一日くらい散歩しなくても大丈夫だろ？鉄也と二人きりでボウリングなんて考えられねえよ。」

「確かにホモかと疑われるぞ。」

「悪いな、散歩のほかにも飯炊いたり掃除したりしなくちゃならないから。」

「それを言われると何も言えないじゃないか。」

英が和人を睨む。

「父子家庭はつらいんだよ。じゃ、そういうことで。」

和人はにっこり笑って部室を出た。

「英、いっそのことクラスの女でも誘うか？」

「クラスの女って誰をだよ？」

「そうだなあ、江本と木村なんてどうだ？あの二人いつも一緒にいるじゃないか。」

「木村はいいけど、江本はちょっとな。それより徹也、あそこを歩いている二人はどうだ？」

徹也は英が指さすほうに目をやった。

「おいおい、バスケ部の2年じゃないか。しかも部活の最中だろ。」

「いや、どうも終わったみたいだぞ。というより部員が集まらなくて練習を休みにしたってところだな。」

「じゃあ英が声かけてみるよ。」

「いいけど、成功したら俺右側の子と組むぞ。」

「待て、あの子は月野さんじゃないか、2年で一番人気がある子だぞ。」

「へえ、詳しいな。でも付き合ってるやついないんだろ？当たって砕けろだ！」

言うが早い英は二人の方へ近づき、声をかけた。

「ほんとに行っちゃったよ、今日の英はやけに積極的だな。」

徹也はちよつと首をかしげながら、3人の方へ寄って行った。

第23話

「よし、クリアーだ！」

和人の声に、左サイドバックの澤田がボールを大きく蹴った。

ボールはハーフウェイラインをわずかに越えて奥山中陣地に落ちた。

決勝戦が始まって15分が過ぎていた。

得点は0対0、互角の戦いだ。

応援団の歓声が轟き、グラウンドは異様な熱気に包まれていた。

それというのも、このサッカーの試合で勝った方の学校が総合優勝を獲得することが決まっているからだ。

5種8大会のうちすでに7大会が終了し、残すはこのサッカーの試合のみ。

現時点での成績は、1位奥山中75点、2位緑丘中74点、3位浜里中と川原中64点と続く。

奥山中と緑丘中の生徒たちでグラウンドの周りはぎっしりと埋め尽くされていた。

その観衆の中に、月野がいることを和人は確認していた。

試合中もボールがコートの外に出ると、月野の顔を探した。

月野は2人の友達といっしょに大きな声援を送っていて、和人と眼が合うことはなかった。

だが、この大舞台で活躍すれば、月野の気を引くことができるかもしれないと、和人は大きな期待を寄せていた。

「松永の調子が悪いみたいだな、俺たちのサッカーができていない。」

英が和人に近づいてきて小さな声で話した。

「この前の試合で右足を痛めていたんだ。あの様子だとかなり無理

をしてるんじゃないかな。」

「ちっ。」

英が少し顔をしかめた後、松永の方へ寄って行った。

「おい松永、足は大丈夫か？」

「え？あ、はい、大丈夫です。ちょっと踏ん張りが利かないですけど。」

「そうか、でもお前のことだ、かなり無理してるだろ。前半はあと5分で終わる。でもその前に1点取っておきたい。」

「どうするんですか？」

「お前はボールを受けたら、無理せず俺か和人に返せ。そしてお前はゴール前に走って相手をかく乱するんだ。」

「はい。」

「さてと、ハーフタイム前にちよつと無理してみようか。」

英はそう呟き、ふーっと息を吐いた。

大粒の汗が英の額から流れている。

「見てろよ奥山中、超中学級のテクニクを見せてやるぜ。」

英の顔が引き締まった。

奥山中は英へ厳しいマークを付けていた。

そのため英は味方からのパスは受けることがなかなかできない。

自然とボールは松永へ集まる。

だが、右足を負傷している松永は思うような動きができずにいた。

また松永へボールが入る。

その瞬間、英がマークを振り切り前線へと駆け上がった。

松永は英の指示通り和人へボールを返す。

和人から英へボールが渡った。

相手のディフェンダーが詰めてくる。

英は素早くボールをまたぎ、そのディフェンダーを抜いた。

さらにもう一人詰めてきた。

その相手も得意のフエイントで抜き去る。

敵が二人同時に詰めてきた。

英は右ウイングの選手にパスを出し、壁パスを受けてそのままタッチライン沿いを走った。

「こっちです！」

ニアサイドに走りこんできている松永が大声を出してパスを要求した。

すると敵のストッパーとゴールキーパーがあわてて松永に張り付く。英がセンタリングを上げた。

ボールは、松永を通り越してゴール正面の清水へ通る。

完全にフリーの清水は落ち着いてヘディング。

ボールはゴール中央へ見事に突き刺さった。

その瞬間、どっと歓声がわきあがった。

英が膝をつき、両手のこぶしを空へ向って突きあげた。

「やっぱり英は違うな。」

和人が両手を腰に当てて、呆れたような顔をした。

そこで前半終了の笛が鳴った。

ベンチへ引き上げる選手たちに、周りから大きな声援が飛ぶ。

和人は月野の顔を捜した。

月野は、――英にタオルを渡していた。

英はそれを受取りながら、月野と二言三言会話をした。

笑いながら、いかにも仲がよさそうに。

（うそだろう、英と月野さんがあんなに仲良く話すなんて…）
和人は眼をぱちぱちと瞬いた。

第24話

ハーフタイムの間中、和人の頭の中は月野と英のことでいっぱいだった。

（二人が知り合いだったなんて聞いたことがない。おそらく最近知り合ったはずだ。共通の友達がいるのだろうか。男子バスケット部キャプテンの鶴田？ いや、あいつが女子バスケット部員と話しているところなんて見たことがない。だとすると、いったい・・・。）

いっそのこと英に直接聞いてみようかと思ったが、和人はその考えを振り払った。

中学校最後にして最大の試合をやっている最中だ。

月野と英のことは気になったが、これから30分間はそのことを忘れなければならぬ。

試合が終わってからそれとなく英に聞くことにしようと心に決めた。

「さあ、泣いても笑ってもあと30分だ。お前たちの力をすべて出し切れ。そうすれば必ず勝てる。いいか、1点リードしてはいるが決して守りに入るなよ。逆にもう1点取れば相手の気力が落ちる。追加点を狙っていけ！」

「はい。」

楠田の指示に全員が呼応した。

「松永は残念だが交代だ。代わりに山中がはいる。山中、ガンガン動き回れ。そしてチャンスだと思ったらシュートを狙っていけ。」

「はい。」

山中は松永と同じ2年生で、試合経験は少なかった。

だが、身長が低くすばしっこい動きをする。

疲れが見える英のパートナーにうってつけだった。

「よし、行ってこい。」

「はい！」

選手がコートに向かって駆け出した。

「監督の言う通りだ。清水、もう一点取りにいくぞ。」

「そうだな、誰かさんの体力はあと少ししか持たないもんな。点を取るなら今しかない。」

センターサークルで清水が英を見てニヤツと笑った。

ピーッ！

後半開始のホイッスルが鳴った。

清水からボールを受けた英が和人へ戻す。

和人から山中へ、山中からもう一度英にボールが渡った。

しかし英は3人からすぐに囲まれた。

やはり敵は英を徹底的にマークしてくるようだ。

英が必死に抜け出そうとするが執拗なマークはそれをゆるさない。

3秒、5秒、英はボールを奪われまいと必死にフェイントやボディーバランスでこらえる。

と、その時、囲まれていたはずの英がボールとともに飛び出してきた。

相手が一人遮ったが、巧みなステップで抜きさる。

そしてまた相手の二人が英に迫って来ようかという時に、英はゴール前にふわっとパスを出した。

すると予測していたかのように清水がディフェンスの裏へ飛び出す。

ボレーシュート。

惜しくもクロスバーに当たりボールが跳ね返った。

だがそのボールは、運よく英の方へ向かった。

英が胸でトラップ。

ボールが地面に落ちる前にシュート。

相手のキーパーは一步も動けない。

ゴール左隅に飛び込んだボールを眼で追うのが精いっぱいだった。
強烈なシュート。

英が応援している緑丘中の生徒へ向って高々と手を突き上げた。
湧き上がる大歓声。

味方の選手たちが英の方へ駆け寄っていく。

だが歓喜の渦の中で、和人の表情だけは曇っていた。

和人には英が誰を見ているかがわかっていたからだ。

英の視線の先、そこには月野の姿があった。

ぎっしりと埋め尽くした生徒たちの中で、月野も英に向って何か叫びながら両手を振っていた。

和人は、――手を腰に当て、天を仰いだ。

第25話

（考えるな。今は試合に集中するんだ。2点差で勝っているからってまったく油断はできない。）

和人は、英と月野のことを懸命に考えまいとした。

だが、目線はついつい月野の方へ向ってしまふ。

ボールがタッチラインを割った時、英がボールに触った時、自分がボールをクリアーした時、月野の表情が気になった。

と、相手の選手から大きなパスが出た。

和人の後ろへ飛び出した敵のセンターフォワードへ、ぴったりのパスだった。

ペナルティエリアでノーマーク。

敵の応援団から「ワー」という歓声があがり、味方の応援団からは悲鳴が聞こえた。

万事休す、と思われたその時、審判の笛が鳴った。

ピーッ。

和人たちがオフサイドトラップを仕掛けていたのだ。

敵はまんまと緑丘ディフェンダーの罠にはまった。

（やった。完璧に決まったぞ！）

和人は真っ先に月野の方を見た。

だが月野の表情は和人の予想に反し、呆れたような顔をしていた。

”決定的なピンチの場面だが、相手のミスによって救われた”
そう誤解しているような表情だった。

（ちがう。俺たちは攻めたんだ。高度なプレーを完成させたんだ。）
そんな和人の思いは届くはずがなかった。

「いいぞディフェンス、伝家の宝刀がついにでたな。」
英が和人の肩をぽんと叩いた。

和人は英に向って軽く手を挙げた。

次の瞬間、和人が月野の方に目をやると、月野はこっちを見ていた。
（さてよ、これじゃまるで俺が英に励まされているみたいじゃないか。）

和人は釈然としないまま、フリーキックのボールを蹴った。

ザッ。

「あっ・・・」

和人の口から気のない声が漏れた。

山中めがけて強いボールを蹴ったつもりが、ボールの下の中もいっしょに蹴ってしまったのだ。

ゴルフでよく言う”ダフリ”という行為だ。

ボールは力なくころころと転がり、敵の選手が楽にインターセプト。そしてそのままドリブルでゴールへ突き進む。

和人は追いつけなかった。

キーパーと1対1。

キーパーは難なくかわされ、無人のゴールへシュートが決まった。

あっという間の出来事だった。

緑丘の応援団から「あーっ」という悲鳴が漏れた。

当然、奥山中の応援団からは割れんばかりの歓声が起こる。

和人は呆然と立ち尽くし、うなだれた。

「すまない・・・、みんな。」

和人は声を振り絞ったが、果たして何人に聞こえたのだろうか。

和人の声はそれほど弱々しかった。

「お前がこんなミスをするなんてな。」

英がニコニコ笑いながら近寄ってきた。

「あの2点で楽に勝てるとは思っていなかったさ。でもまさか和人が・・・、って感じだな。ドラマを作ってくれるぜまったく。そんなに落ち込むなって、まだ1点リードしているんだからさ。」

英の声はやさしく、それでいて力強かった。

（これが本当に自分と同じ中学3年生なんだろうか。）

サッカーのプレーとともに心までも急激に成長している英を、和人は遠い存在に感じていた。

そして初めて、英に対して劣等感を抱いた。

和人は自分の両ほを両手でぱちんと叩いた。

「ちくしょう、負けてたまるか、絶対に。」

言いながら和人は英を見つめた。

「お、おう・・・でも敵はあっちだからな、あっち。」

英が奥山中の選手を指さしながら笑った。

「さあみんな、和人のアドレナリンがあがったぞ。和人に近寄るなよ、吹き飛ばされるからな。」

英が声を張り上げると、みんなの表情がゆるんだ。

（ちくしょう、やっぱり英は1歩前を歩いてやがる。）

そう思いながら、和人もつられて笑った。

それからの和人のプレーは目を見張るものがあつた。

味方の選手に大きな指示を出し、サポートに動き回った。

英へのマークは依然として厳しく、さらに疲労もかなり蓄積しているようだった。

その英の分をカバーするかのようになり、和人は精力的に動きまわった。奥山中は、失点を覚悟でどんどん攻めてくる。

試合終了間際、一瞬のすきを突き奥山中の強烈なロングシュートが放たれた。

誰もが息をのんで、ボールの行方を追う。

ボールは、――大きな音をたててゴールポストに当たり跳ね返った。そしてそこで試合終了の笛。

2対1、緑丘中の歴史的勝利だった。

沸き起こる大歓声。

緑丘中の選手たちが一斉にベンチへ走ってきて、楠田を胴上げしだした。

試合前に、あらかじめ選手全員で決めていたことだった。

楠田は感極まって泣き出し、選手たちはそれを見て笑い合った。

月野が英を祝福している姿が和人の目に入ったが、それでも和人は満面の笑みで仲間と喜びを分かち合っていた。

和人にとって中学校最後の公式戦は、最高の形で幕を閉じた。

第26話

「おい、その天才君、それ以上勉強してどうするんだ。」

和人が下校していると、後ろから英の声がした。

振り向くと英がにこっと笑った。

英は一人ではなかった。

隣には女の子――月野が並んで歩いていた。

「絶対に受かるという保証はないよ。やるだけやっとならば自信もつくし。」

「お前が落ちるんなら俺なんか夢の中でも受からねえよ。」

「あら、私は園山先輩が合格するのを一週間前に夢で見たわ。」
にこにこしながら月野が話に入ってきた。

西部地区対抗戦の最後の試合から実に5か月が経とうとしていた。
サッカー部のヒーロー英と2年生一かわいいと噂される月野のカップルは、学校中の話題の的になっていた。

英と月野が知り合ったきっかけを、前川徹也から和人はきいた。

最初は英と徹也、月野とその友達の4人でボウリングに行ったのだが、英と月野はすぐに仲良くなり、次の日は二人だけでボウリングに行ったという。

聞いた直後はかなり落胆していた和人であったが、しかたがないことだとあきらめざるを得なかった。

ただ、月野が笑った時にでる左ほほのえくぼを見る度に、和人の胸は高鳴った。

「その夢は西城高校だったのか？本当は北高だったんじゃないか？」
「ううん、確かに西城だったわ。『サッカー部に入って、橘先輩と一緒に北高を倒すぞ。』って息巻いてたもの。」

「ようし、聞いたか和人。千波の夢は未来を写す夢なんだ。なんか

そんな言葉があったよな、なんて言ったわけ…。」

月野の名前は千波といった。

「予知夢のことか？」

「そうそう、その予知夢だ。俺は必ず合格する。きっと、たぶん、もしかしたら…。」

「おいおい、本当は自信がないんだな。受験まで1か月を切ったっていうのに。」

「橘先輩、実は今日、園山先輩ったらね、担任の勝見先生から『合格する確率は、今のままなら5%だ。』って言われたんですよ。」

「え？50%じゃなくて、5%？」

和人がぷつと噴き出した。

「担任の発言として、いくらなんでも5%はないだろう。俺を落ち込ませてどうするんだって感じだよ。消費税じゃあるまいし5%なんて。」

「でも英、本当に落ちちゃったらどうするんだよ。私立も受けなかったし、高校浪人なんて聞いたことがないぞ。」

「心配ご無用、長い人生のほんの一年間じゃないか。例え浪人しても千波と同級生になれば、それはそれでまた面白いかも。」

「橘先輩、騙されないで下さいね。本当は滑り止めをちゃんと確保しているんですから。」

「おい、それは言わない約束だろ。」

英は千波をちよつとにらんだ後、和人に説明した。

「実は西部地区対抗戦の後に、北高の和田監督と会ったんだ。」

「えっ、和田監督ってあの、和田監督？」

「そう、で、言われたんだ、うちに来ないかって。」

「ええっ？和田監督自ら勧誘しにきたの？」

「ああ。奥山中との決勝戦を見に来ていたらしいんだ。」

「すげえ、それってすげえじゃんか。で、英はなんて言ったの？」

「誘っていたいたのはとてもありがたいんだけど、持病を抱えて

いてとても北高の練習についていけないから、すみませんって。」

「持病？」

「ほら、おれ体力が極端にないじゃん。あれってたぶん内蔵のどこかが悪いと思うんだよな。」

「そんなことわからないじゃないか。」

「いや、十中八九間違いない。」

「もったいないなあ、和田監督がそれだけ目をかけてるってことは、もしかしたら一年生でレギュラーに抜擢されるかも知れないのに。」

「いや、北高の練習は半端じゃないよ。たぶん俺には無理だ。」

「でもさっき滑り止めて言ってたのは？」

「ああ、和田監督が言ってくれたんだ。もし西城に受からなかったら北高が拾ってやるって。」

「ふうん、そういうことか。でも、本当にすげえ。なるほど、それなら西城に受からなくても大丈夫……。」

「それは違うぞ、和人。俺は本気で勉強してるんだ。本当に高校浪人してもいいと思っている。俺の人生のわかれ道なんだ。」

和人の言葉を遮り、英が矢継ぎ早に話した。

そしてふーっと息を吐いた。

「すまん、柄にもなくちよっと興奮した。……まあ、そういうことだから和人、これからも勉強を教えてください。」

「わかった。」

いつの間にか前川サイクリング店の交差点に来ていた。

和人は英と千波に「じゃあ。」と手をあげた。

すると英が、

「おいおい、今言ったこと聞いてなかったのか？俺んちにきて勉強を教えてくださいよ。」

「えっ、今から？だって、デート中だろ？」

「違うよ、千波はこの先の友達んちへ行くところなんだ。なっ。」

「はい、実はそういうことだったのです。」

千波が笑った。

「しかたないなあ。じゃあ1時間半だけだぞ。」
和人は英の家の方角へ向きを変えた。

第27話

「ただいま。」

いつものように和人がクロベエを散歩させて帰ると、居間に父がいた。

今日は残業をせずに帰ってきたようだ。

「お帰り、今日はなぜこんなに早く帰ってきたと思う？」

「知らないよ。」

「ふっ、今日は月に一度の給料日なのだよ、和人君。」

「それで？」

「なんだよ、お父さんが毎日身を粉にして働いているっていうのに、感謝の心はこれっぽっちもないんだな。」

「そりゃ感謝してるけど、それと早く帰ってくるのとどう関係があるの？」

「お父さんは決めたんだ。給料日の日には出前を取る。しかも寿司だ。」

「おう、それはすばらしい。」

「だろ？6時半に届くことになってるから、間もなくだな。それと今日は携帯電話を買い替えたぞ。フォーマって言ってなんとテレビ電話ができるのだ。」

父は自慢げに携帯電話をハンドバックの中から取り出した。

「それは！」

取り出された携帯電話を見て和人は眼を見開いた。

「どうした、和人。」

「いや、それと同じ携帯を前に見たことがあったから。」

「そんなはずはないだろう、3日前に発売されたばかりだぞ。でもまあ、もしかしたら広告か何かを見たのかもしれないな。」

ピンポーン。

玄関の呼び出し音が鳴った。

「おっ、寿司が届いたかな？」

父が財布を持って玄関へ向かった。

和人はその携帯電話をじっと見ていた。

（あの携帯と同じだ。）

― 時を止める携帯電話、半年ほど前に拾って2、3日使ったあと交番へ届けたあの携帯電話に瓜二つだった。

でも父は3日前に発売されたばかりだと言っていたし、和人が拾ったやつは、かなり古ぼけている感じがしていた。

（記憶違いだろうか？でもよく似ている。）

「0」のボタンの下の「STOP」と書かれたボタンは、当然なかった。

和人は右手の人差し指で左の腕の3センチほどの古傷を触っていた。考え事をするときの和人のいつもの癖だ。

「ほら、寿司だぞ、うまそうだぞ。」

父がにこにこしながら寿司を運んできた。

「どうした和人、ぼかんとして。さあ皿を持ってきてくれ、俺はビールを持ってくる。」

和人は言われたとおりに皿をもってきて座った。

父はコップにビールを注いで飲みだす。

「く、うまいねえ。さあ和人どんどん食えよ。」

「あ、うん、いただきます。」

和人も牛乳をコップに注いだ。

（そういえば交番に届けてそろそろ6カ月だな。持ち主が現れたんだろうか。それとも持ち主が現れずに、俺のものになるのかな。それに、なぜニューモデルのやつと同じデザインなんだ。）

和人は箸をつかんだ。

（・・・まあ、携帯のことは後でゆっくり考えよう。まずは寿司だ。

）

トロをめがけて和人の箸が飛んだ。

そして口の中へ。

「うめえ！」

「そうだろう、たくさん食べろよ。」

父の顔はビールですでに赤くなり始めている。

和人は久しぶりの寿司を堪能した。

第28話

その電話はついに来た。

和人が漫画喫茶へ行こうという徹也の誘いを断って家に帰ると、留守番電話に録音されていたのだ。

「もしもし橘和人さんのお宅ですか。8月28日に拾得物の届け出をされた携帯電話ですが、持ち主が現れませんでしたので、ご希望通りお渡しいたします。南町交番へお電話ください。番号は〇〇〇―〇〇〇〇です。」

和人はその音声をじっと聞いた後、受話器を取り言われた番号へ電話をかけた。

「はい、南町交番です。」

かなり低いが何となく優しそうな声の男性が電話に出た。

「あ、あのう、電話をいただいた橘和人といいますが。」

「あ、はいはい、橘さんですね。えーと、8月に拾われた携帯電話ですけども、受け取りを希望されますか？」

「はい、もちろんです。」

和人が勢いよく答えると、相手の警察官はちよつと意外そうにこう言った。

「はあ、そうですか。しかし、かなり古ぼけてますよ。お店に行けば安くて上等の携帯が売っていますけどね。」

「それでも欲しいんです。」

和人はしっかりとそう言った。

「そうですか。では今日5時半までに受け取りに来られますか。それとも後日になさいますか。」

「今から行きます、30分以内に。」

「えー、では印鑑を持ってきてくださいね。」

「わかりました。」

和人は電話を切るとすぐに、印鑑を探しポケットに入れた。

（とうとう待ちに待ったこの日が来たぞ。ついにあの携帯が俺のものになるんだ！）

和人は急いで靴を履き玄関を出ようとしたが、はっとして電話の前に戻った。

（いけね、留守録を切つとかなきゃ、お父さんに聞かれてしまう。）はやる気持ちを抑えながら和人は留守録を消去した。

そしてもう一度靴を履き、散歩をせがむクロベエをにべもなく振り切って走った。

交番へは20分ほどで着いた。

中に立っていたのは届け出た時の警察官ではなかった。

ちよっと年配のやさしそうな感じの人だった。

「橘です、先ほど電話した。」

和人は息を整えながら小さな声で言った。

額には汗がにじんでいる。

「走ってきたのかい？明日でもよかったのに。どうぞ。」

警察官は椅子に座るように手で合図した。

そして机の引き出しからあの携帯電話を出した。

携帯電話はビニール袋に入っており、ビニールには「8/28南町交番」と黒のマジックで書かれていた。

「こんな古ぼけたのを欲しがるなんて君も変わってるね。それとも珍しい特別なものののかい？」

言いながら警察官は和人の前にその携帯電話を置いた。

「いえ、その、…まあ何となく。」

「うん、ま、いいか。別にこちらが困るわけでもないからね。この携帯は、念のため確認させてもらったんだが、確認っていうのは個人情報が入っていないかってことなんだが、最近個人情報はどうのってけっこううるさいからね。」

警察官は座って話した。

「若い警官にもみてもらってね、調べたわけなんだが全く何も登録

されてないみたいなんだよ。電話をかけた形跡も、受けた形跡もないしね。個人情報が少しでもあればこうやって第三者に渡すことはできないんだけど、まあ君にとってはそれが良かったってことだね。それと昨日までは電池が少し残っていたんだが、本署の連中がその個人情報チェックするっていうんでいろいろ操作するうちに電池が切れちゃったらしいんだ。ま、仕方ないことだね…」

「あのう…」

警察官は話好きらしく、黙っていると言話が終わらないようなので、和人が口をはさんだ。

「印鑑を持ってきたんですけど。」

「ああ、それならこの紙に今日の日付と名前を書いて、こここのところに印鑑を押してもらおうかな。」

和人はすぐに言われるとおりにした。

「はい、じゃあこれで良しと。携帯電話をお渡ししますね。ああ、急いできたみたいだからのどが渴いたんじゃないかな。今お茶を入れるからちょっと待っててね。」

警察官がお茶を入れようと立ち上がると同時に、和人も立ち上がった。

「いえ、ちょっと急ぐもので、これで帰ります。ありがとうございます。」

「え？あ、ちょっとゆっくり…」

警察官が止めるのも聞かず和人は急いで立ち去った。

第29話

（やはりこの携帯はお父さんの買ったものと同じだ！）

家に帰った和人は携帯電話を机の上に置いた。

よく見ると「FOMA」という文字が液晶画面の上の方にある。

6カ月も前からFOMAが発売されているはずはない。

しかも表面の消耗の度合いは、購入して1年以上は使っていると思われる。

（すると、この携帯は…）

すぐに和人は一つの答えを導き出し、全身に鳥肌が立った。

（もしかしたら”未来からやってきた”ということになるのでは！）

和人は父の携帯の充電器を居間から持ってきて、充電を始めた。

6か月前と同じように時間を止めることができるかどうか、一刻も早く試してみたかった。

だが、充電にはしばらく時間がかかる。

充電が完了するまでの間、クロベエの散歩に付き合うことにした。

以前は千波と出くわすことを期待して散歩をしていた和人であったが、千波と英が付き合うようになってからは、むしろ出会わないようにと思っていた。

というのも、和人の千波への思いが変わっていないため、英に対してなんとなく後ろめたい気持ちがあるからだった。

千波の姿を見れば見るほど、胸がときめいてしまう。

だから今はできるだけ会わないようにしなければならぬと思っていた。

最近の散歩コースは、千波の家と反対方向を選んでいた。

幸い、千波は部活をしていて夜遅いため、太郎の散歩は小学校6年生の弟に任せているらしい。

犬の散歩で出くわすことはほとんど考えられなかった。

だが、その日はいつもと違っていた。

バスケット部の練習が早く終わったのだろうか。

和人たちが10分ほど歩いたところで、道の正面から千波が太郎を連れて歩いてくるのが見えた。

和人は自分の心臓の鼓動が急に速くなって来るのを感じていた。

（何でこんな道を歩いているんだよ。）

和人の気持ちとは裏腹に、千波と太郎はまっすぐこちらへ歩いてくる。

さらに太郎がいつものようにいち早くこちらに気づいて吠えだした。脇道もないし、いまさら引き返すわけにもいかない。

双方の距離は瞬く間に縮まっていった。

「まったくこの子ったら、いつまでたっても進歩がなくて……」

ワンワンとけたたましく吠えさかんに動き回る太郎のリードをしっかりと握りながら、千波が話しかけてきた。

「千波ちゃんを守ろうと必死なのかもしれないよ。」

「いつしか和人は千波を”千波ちゃん”と呼ぶようになっていた。

顔がそれほど赤くならないのは、千波と話をすることが幾度となくあったからだ。

「英は？今日は一緒じゃなかったの？」

「いつもいつも一緒にいるわけじゃないですよ。園山先輩は最近受験勉強に忙しいし……。それじゃ、失礼します。」

ぺこりと頭を下げ後ろ向きで太郎を引っ張りながら、千波が離れていった。

和人は前を向き、ふうーと息を吐いた。

（相変わらずかわいいな。それにそれほどドキドキせずに話ができた。俺にしては上出来だ。それにしても英は今大変だろうな。時間が足りなくて焦ってるんじゃないだろうか。）

顔をしかめながら猛勉強している英の姿が目に見えた。

（そうだ、時間を止める携帯電話のことを英に話してみたらどうだろう。）

この和人の考えはこれまで何度もあった。

だが、その度に打ち消してきた。

誰か一人、たった一人に話しただけで、噂は世間に広まってしまう。

例え「誰にも言うなよ」と念を押しても、今度はその人が別の人に「誰にも言うなよ」と念を押して話してしまう。

噂とはそういうものだと思っていた。

だから、今まで誰にも携帯電話のことを話さなかった。

（でも英は信頼できる親友だ。その親友が追い詰められている。それなのにだまって見過ごしてよいのだろうか。困っているときに助けないなんて親友として失格ではないのか。）

そこまで考え、和人は決心した。

（とにかく明日英に会ってみよう。そして本当に追い詰められているとしたら、携帯電話のことを教えてやろう。英は歓喜するに違いない。）

「走るぞ、クロベエ。」

和人は散歩を早く切り上げたくて、走り出した。

第30話

和人は散歩から帰るとすぐに携帯電話を手にとった。
充電はまだ完了していない。

だが、もうそろそろ父が帰ってくる頃だったので、充電機を外し居間に戻した。

（さて、ちゃんと動くだろうか・・・？）

和人は真剣なまなざしで「STOP」ボタンを長押しした。
すると液晶の画面が眩く光り、赤い文字で「Time must stop!」という文字が浮かび上がった。

和人は置時計に目を移した。

時計の針は、――止まっている。

（よし、大丈夫だ。時は止まった！）

和人はほっと息をついた。

「さてと、ちょっと探検でもしてこようかな。」

背伸びをしながらそう言うと、和人は携帯電話をポケットに入れた。

「どっちに行こう？」

玄関を出た和人は少し迷った。

「とりあえず学校の方だ。」

時を止めた瞬間から、完全な静寂（無音）の状態が続いている。

和人がわざと声を出すのは、誰からも聞かれる心配がないことはもちろんだが、無音がとても気味が悪いということを感じているからだ。

妙に落ち着かなく、ストレスがたまっていくような気がする。

しばらく行くと、スーパーマーケットが見えた。

ちょうど人が出てくるところで、自動ドアが全開になっている。

和人は中に入ってみた。

店内は夕飯のおかずを買いに来る客で込んでおり、奥の方まで入るためには誰かに触れる危険があった。

「あんまり知っている人はいないみたいだな。おっ、あれは徹也のお母さんじゃないか。」

5mほど先に前川徹也の母がいた。

隣に立っている同年代の女性と話をしているらしく、大きな口をあけて笑っている。

「おっ、あっちには幸雄がいるぞ。コーラとお菓子がかごに入っているな。」

幸雄は2年生の男子で、和人の幼馴染だ。

和人は何か思いついたらしく、ニヤツと笑い幸雄の方へ歩いて行った。

幸雄の前に立つとかごの中のコーラの缶を取り、冷蔵庫の中にあるトマトジュースと変えた。

「ははは。」

時が戻ったときレジの前でびっくりする幸雄の姿を思い描いて、和人は笑った。

レジの方を振り向いた和人は、笑っていた口を閉じた。

店員がレジからおつりを出しているところだった。

レジの中からは1万円や5千円札、千円札が何枚も見えている。

和人ははっとして思った。

（なんてことだ！泥棒をしようと思えばいくらでもし放題じゃないか。防犯カメラにも映らないでレジの中からも、客の財布からお金が抜き取れる。しかもお金だけじゃなくこの陳列棚のものだっていくらでも・・・。）

和人はあわててスーパの外へ出た。

そしてポケットから携帯電話を出し、握りしめながらしばらく歩いた。

（まずい、俺は泥棒なんかしたくないのに、これを持っているといつかはやってしまうんじゃないだろうか。この誘惑は・・・、まずい、絶対にまずいぞ。）

少し落ち着いて考えたかった。

「とりあえず中央公園に行こう。」

100メートルほど歩くと中央公園についた。

ベンチにどっかりと腰を下ろすと、和人はじっとその携帯電話を見つめた。

第31話

「欲しいものは何でも手に入る……。」

和人は目をつむり携帯電話をぎゅっと握りしめた。

「お金、ゲーム機、パソコン、サッカーシューズ、……そりゃあ今急に金持ちになって何でも上等のものを持っていたら、みんな不思議がるし、第一お父さんがすぐに疑うはずだけど。でも……。」

和人は眼を開けばんやりと遠くを見つめた。

「でも、高校生になれば寮生活だし……。お父さんと会うことはそんなにない。それに、その時にいろんなものを持っていたってお父さんには気づかれないようにすればいい。後はみんなに、お父さんからの仕送りが多いと言えればいいんだから。」

ふうっと和人は息を吐いた。

「すごいな。ほんとうにすごい。」

だが、和人の表情は曇っていた。

それで、そんなことでいいのだろうか。

ただの泥棒に成り下がって、何の苦勞もせずにこのまま大人になっていく……。

”寄生虫” ― ふと、和人の頭をそんな言葉がよぎった。

”止まった時間に寄生する気味の悪い虫”。

そんな虫の生き方を自分は望んでいるのだろうか。

和人は10年後、20年後の自分の姿を思い描いた。

他人からくすねた金で外国に旅行し、高級ホテルを転々とする。

ブランド物のスーツを着飾り、遊んでばかりの日々。

周りにはいつもスタイルのいい美女が寄ってくる。

もちろん金目当ての頭が悪そうな女だ。

自分は幸せな顔をしているだろうか……？

すると、その未来の自分が、こっちを振り向いた。

――笑っている。

だが、その笑顔は情けないほどにゆがんでいた。

ひきつった口元、どんよりと曇った眼、かん高い笑い声……。

およそ自分が望む将来の姿と大きくかけ離れている。

”自分が望む将来の姿”――それは……

たとえ貧しくとも楽しみや希望を見つけないがらしつかりと生きていく自分、そしてやさしい妻（千波？）とやんちゃな子供に囲まれ、取るに足りない事件に悩まされたり喜んだりしている自分の姿だ。その表情は誰からも愛されるように、朗らかでなければならぬ。

和人はすっと立ち上がり、携帯電話をズボンのポケットにしまいこんだ。

「よし。」

小さくそう呟くと、花壇に咲いている小さな白い花を一輪摘んだ。

「時間を止めるのは、なるべくひかえよう。困ったことが起きた時にだけしか使わないようにすればいい。そうだね。」

和人は砂場の砂を山のように盛り上げ遊んでいる幼稚園の子どもたちに向かって話しかけた。

「この山が一瞬で壊れたらびっくりするだろうな。」

そう言うとき和人はその中の一人の女の子の髪にそっと白い花を挿した。

和人は、公園から立ち去ろうとしていた。

この究極の静寂から早く解放されたくなっていたからだ。

「早く家に戻って時間を動かすでしょう。……ん？待てよ、今の場所で時間を動かせばどうなるんだ？」

和人は少しの間立ち止まり考えた。

そしてすぐににこっと笑った。

「つまり俺は、自分の家からここへ瞬間移動したことになる！ すごい、すごいぞ。」

和人は携帯電話をポケットから取り出し、辺りを見回した。

「この場所はちょっと悪いな。向こうのおじさんなんか完全にこつちを見ているし。誰から見つかからない場所は……。そうだとトイレの中だ。」

和人は急いでトイレに行き、トイレの中に誰もいないことを確認すると、ゆっくりと「STOP」ボタンを押した。

ざわざわと木の葉の揺れる音が聞こえた。

― 時が動いたのだ。

和人はトイレを出ると、自分の家に向かって歩き出した。

「あれ、マリちゃん、髪にお花がついてるよ。」

「えっ、どうして？ 誰がつけたの？」

砂場から園児のかわいらしい声が聞こえてきた。

第32話

翌日は大雨。

和人は玄関から出たものの、あまりの土砂降りに立ちつくした。

（ちえっ、小降りになるまで待つか。）

だが、もう一度玄関を開けて中に入ってはみたものの、5分たっても雨は衰えない。

父は30分ほど前に出勤している。

和人はため息をつき、玄関のドアを開けようと手を伸ばしたが、あるアイデアがひらめいた。

（そうか、瞬間移動だ。あれを使えば濡れずに学校へ行ける。）

和人はカバンの中から携帯電話を取り出した。

「時間よ止まれ。」

小さな声でそう言いながら、和人は「STOP」ボタンを押した。

まばゆい光とともに、（あれほど大きな雨音がすっと消え）静寂が和人を包んだ。

自分の耳が聞こえなくなったような錯覚。

「よし。」

微笑みながら玄関を開けた和人は、目を見張り立ち尽くした。無数の小さな雨粒が空中に浮いている。

「うわあ、すげえ！」

雨粒は細くもなく、イラストで描く涙のような形もしていなかった。完全な球体。

それが空中にぎっしり浮かんでいた。

和人はそつと手を伸ばし、そのうちの数滴を押してみた。

するとその雨粒は球体を維持したまま、押されて止まった。

「へえー、おもしろいな。」

ふうっと息を吹きかけてみると、小刻みにぶれながら後退する。

和人は手を伸ばし傘をさしてみた。

パラパラパラ、と雨粒が傘に当たる音がする。

傘を閉じてみると、傘を開いていた場所には雨粒がなく、ちょうど透明な傘がそこにあるような感じがした。

「よし、行ってみるか。」

和人はもう一度傘を顔の前にさして歩きだした。

パラパラパラ、雨粒を押しながら前に進む。

膝から下の部分は傘でカバーできないため、雨粒が足に当たる。

雨粒はズボンにはしみ込まずにやはり移動するのみだ。

歩くうちにだんだんと傘の受ける抵抗が強くなってきた。

おそらく傘の前にぎっしりと雨粒が重なっているに違いなかった。

和人は傘を少しすぼめながら歩いてみた。

すると急に傘にかかる圧力が弱くなった。

「ようし、このまま進もう。」

前川サイクリング店の前の交差点に差し掛かった。

信号は赤だが関係ない。

車と車の間を歩いた。

「今、時が動き出したらアウトだな。ノーブレーキの車にはねられちまう。」

そこから少し行くと、徹也の姿が見えた。

傘をさし、カバンを脇に抱えているが、両足が地面についていないところを見ると走っているということだろう。

歯を食いしばり、顔をしかめている。

「ははは。」

その顔を見て、和人は笑ってしまった。

「がんばれよ、徹也。俺は先に行かせてもらおうぜ。」

徹也を追い越そうとしたとき、ふと和人は気づいた。

横を走る車のタイヤのところから、徹也の体のすぐそこまで水がき

ている。

おそらく水たまりを車がはねたのだろう。

このままだと確実に徹也の胸のあたりまで水がかかることになる。

「俺と出会えてラッキーだったな。といってもお前は俺のことを見ることはできないけど。」

言いながら和人は徹也に降りかかりそうな水を、傘を使って徹也の後方に移動させた。

「これは”貸し”だからな、徹也。いつか礼をしてもらうぜ。」

それから10分ほどが経ち（時計は動いていないが）、和人はようやく学校へ着いた。

後ろを振り向くと、和人が歩いてきたところだけぽっかりと雨粒がない。

まるでトンネルができたみたいだ。

「あそこを戻れば、簡単に家に帰ることができるんだな。ま、戻る必要もないけど。それにしても早く着きすぎた。せっかくだから受験勉強でもするか。」

和人は上履きに履き替えトイレに向かった。

そしてトイレに誰もいないことを確認して、「STOP」ボタンを押した。

第33話

時が動き出した。

和人はトイレを出て自分の教室に向かった。

途中、玄関の前を通ると、生徒たちが濡れた制服への対応であわただしく動いていた。

（かわいそうに、あのズボンじゃ着替えなきゃどうしようもないな。

）

和人はその中の一年生男子の姿を見て思った。

教室に着くと、クラスメートはまだ数人しかいなかった。

「おはようっす。」

皆に聞こえる声でそう言いながら、和人は教室の中に入った。

「あれ、今日は早いじゃないか、和人。」

声をかけてきたのはバスケ部の北島だった。

「さては、車で送ってもらったな。」

「そういうこと。こんな土砂降りの日に傘をさして歩いてくるなんて考えられないね。」

「歩いてきて悪かったな。うちからは歩いてすぐだからって送ってもらえないんだよ。」

「それにしても本当に車で来る人が多いな。」

和人は教室の窓から外をみた。

「おっ、あれは英んちの車じゃないか。正門の前に止まったぞ。ドアを開けて、傘をさして、――出てきた出て……きた。」

和人の声のトーンが急に下がった。

（嘘だろう……。何で千波ちゃんが英んちの車に乗っているんだ！）

「ビュービュー。我が校のベストカップルが同じ車に乗ってきたぜ。もしかしたら彼女は昨夜園山の家に泊まったのでは！」

北島がクイズのアナウンサーの如く、マイクを握り締めたような恰好で大きな声を出した。

「和人、これは親友として園山に真実を問いただすべきだぞ。」

「あ、ああそうだな。真実を問いただしに行こう。それに別の話もあるし。」

和人は笑顔でそう言ったが、頬のあたりが少しひきつっていた。

「朝っぱらから見せつけてくれるな。」

廊下を歩いてくる英にむかって和人が言った。

「見てたのか。だから正門の前でおろすなって言ったのに、うちの親父ときたら。」

「親公認の仲ってことか。」

「昨日千波をうちに呼んだんだよ。そしたらうちの親、妙にちやほやしやがって俺の部屋にジュースやお菓子を持ってきたりさ、千波のことじろじろ見たり。今日だって俺だけ送ってもらはずだったのに親父ったら『千波ちゃんも乗せていこう』ってきかないんだ。」

「そうか。でも昨日俺学校終わってから千波ちゃんと会ったんだけどな。」

「ああ、確か千波もそんなことを言っていたな。犬の散歩で会ったんだろ？」

「そうなんだけど、あの時千波ちゃん、お前が受験勉強で忙しいから会えないようなことを言っていたぞ。」

「ところがな、どうしても会いたくなっちゃったわけよ。」

「それで夜に呼び出したのか？信じられないぜ。」

「夜って、まだ5時にもなっていないかったよ。それでな・・・。」

「まあいいや、それより英、とってもいい話があるんだけどな。」

和人は千波の話を遮って、例の話を打ち明けようと意を決した。

「へえ、何だろ、いい話って。」

英は少しだけ興味を持った表情をしたが、構わず自分の話を続けた。
「でもその前に俺のいい話も聞いてくれよ。実はな高校受験を目前

に控えて、さすがの俺もちよっぴり不安だったわけよ。それで千波に泣きついたんだ。」

「泣きついた？」

「本当に泣いたわけじゃないぞ。元気づけてくれって頼んだんだよ。」

「それでお前の家に来たってわけか。」

「ほとんど無理やりだけどな。でも千波のやつ俺の親に初めて会って緊張しちゃってさ。それがまた可愛かったりするわけだ。」

「ふうん、それで？」

和人は平常心を装っていたが、内心は嫌な予感がしていた。

「ま、さっきも言ったように親がお菓子やジュース運んできて、初めのうちは落ち着かなかったんだけどさ、落ち着いてきてから千波に言ったんだ、不安で不安でたまらないって。」

「そしたら？」

「そんな弱気なのは園山先輩らしくない、大丈夫だからしっかりしてって言われたよ。」

「ほう。」

「でも最近不安で夜も眠れないから、力を貸してほしいって頼んだんだ。・・・キスさせてくれないかって。」

「・・・。」

「で、めでたしめでたしって訳だ。」

「したのか？キス。」

「そう！・・・千波可愛かったぞ。その後千波んちまで送って行ったんだけどさ、ずっと真っ赤になったままなんだ。おかげで俺様の気合もばっちり入りまくって、2時まで勉強しちまったぜい。すごいだろ？」

「おお、・・・すげえな。・・・とうとうキスまでしちゃったのか。」

和人は努めて明るく言った。

「ま、和人も早く彼女見つけろよ。そうだ、千波の友達紹介しても

らおうか？」

「いいよ、今は受験で精いっぱいなんだから。」

「それもそうだな、じゃあ受験が終わってからということ。ところでさっき何かいい話があるって言ってたな？」

「あ？ ああ、あれは・・・、そう、レンタルビデオのただ券をお父さんにもらったから、よかったら英にやるよ。」

「・・・それだけ？ しかも今の俺、ビデオ借りる余裕ないってわかってるくせに。おい和人・・・。」

和人は英の声に耳を貸さず足早に立ち去ってしまった。

第34話

（俺は何をパニックしてるんだろ。英と千波ちゃんはいいいカップルで俺が間に入る余地なんかないのに。親友として一緒に喜んでやらなきゃならないのに・・・。）

教室に戻った和人は自己嫌悪に陥っていた。

自分がとても小さな人間に思えて情けなかった。

だが、千波を思う気持ちはまったく変わらない。

どうしようもなく好きで、好きでたまらなかった。

いっそ告白した方が楽になるんじゃないかとさえ思った。

雨は今も激しく降っていた。

「どうだった？和人。」

ふいに北島が近寄ってきた。

「うん、北島の言うとおりだった。月野さんは昨日英の家に泊まったらしい。」

「な、なに！」

「て、アホか。親がそんなこと認めるはずがないだろ。英の親父さんが月野さんも送って行こうって言ったらしいんだ。」

「あたりまえだろ。リアクションだよ、リアクション。」

北島が顔の前に人差し指を出し、チツチツと横に振った。

「でもそうか、いよいよ家族ぐるみの付き合いになったんだな。あの純真な千波ちゃんが・・・園山の毒牙にかかって・・・一段、一段と堕ちて行くんた。南無阿弥陀仏・・・。」

「大げさな。とにかく俺は今から勉強するんだから、自分の席に着いてくれ。」

「ひゅー、和人は受験生のかみだな。赤まきがみ青まきがみ黄ま

きがみ、受験生のかがみ・・・。」

「何わけのわからないこと言ってるんだよ。」

言いながら和人はふっとかすかに吹き出した。

今の北島との会話で、空気がいくぶん軽くなったような気がした。

（まあ、英には千波ちゃんがついている。それに時間が止まることを教えたって、何時間かごとには充電しなくちゃならない。充電の時間は時間を止めておくことはできないんだから、よく考えたら3日後の受験まであまり時間は取れないんじゃないかな。）

和人は自分で自分の考えに納得し、頷いた。

（それにむしろ、時間を止めれることを英に話したら、カンニングのために使うかもしれない。それだけは絶対にさせてはいけない・・・いてっ。）

和人は考え事をする時に、左腕の傷をかく癖がある。

今もまたきつくかきすぎたらしく、ごく僅かに血が出てきた。

和人はティッシュでその血をふき教科書を開いた。

「さあ、がんばるとするか。」

誰にも聞こえないような小さな声で和人は呟き、ふうっとため息をついた。

「和人、ちょっと部活に顔を出さないか？」

放課後、正門を出たばかりの時に英が追いついた。

雨は降っていない。曇り空だ。

「冗談だろう、よくそんな余裕でいられるな・・・。」

「余裕じゃないよ。ただダメなんだ、運動しないとき、体が調子悪いんだ。受験前に体調を崩したらまずいだろう。」

「いや、下手に汗かいて風邪でも引いたら最悪だな。」

「そんなこと言わずに1時間だけ付き合えよ、な。今日はグラウンドが使えないからたぶん第2体育館でフットサルをやると思うんだ。」

英の一生懸命な説得に和人の気持ちが揺らいだ。

「本当に1時間だけだぞ。」

「さすが和人！そうこなくっちゃ。」

笑いながら英が和人の目の前に体育館シューズを出した。

そのシューズには「橘」と名前が書いてある。

「それは俺のシューズじゃないか。手回し良すぎだぜ、まったく。」

二人は第2体育館に向かって歩き出した。

第35話

第2体育館は人家がない小高い丘の上にあり、プールやテニス場など複合スポーツ施設として使用されていた。

もともとは市が管理する市民体育館だったのだが、市民体育館の建て替えに伴い、部活動用として中学校に移管されていた。

かなり老朽化が進んでおり、あと2年後には取り壊す計画らしい。中学校からは歩くと30分もかかる程の距離だが、使用する部はジョギングをしていくため、ちょうどよい準備運動になっていた。

「1時間だけ付き合うって言ったのは、練習時間のことだからな和人。この移動の時間は当然含まれないぞ。」

「はいはい、どうにでもしろ。」

和人たちが体育館に着くと、松永が血相を変えて飛び出してきた。

「よう松永、あわててどうしたんだ？」

和人が尋ねると松永が体育館の中を指さし叫んだ。

「大変なんです！桑田の手首の動脈のところが切れてしまって、血が止まらないんです。楠田先生はまだ来ていないし、救急車を呼ぼうにも電話がないんです！」

「しまった！今日は高校受験の3日前だったんだ。」

英がはじかれたように血相を変えて体育館の中へ駆け込んだ。

和人も遅れて中へ入る。

体育館の壁近くにはサッカー部員が集まって騒いでいた。

その中心には桑田が倒れている。

「どけ、みんな！誰かタオルを持ってこい！ほかのやつは外に出て誰でもいいから大人を捕まえるんだ。携帯を借りて救急車を呼べ！」英がてきぱきと指示を出し、1年生が持ってきたタオルを桑田の肩の近くできつく縛った。

「ちくしょう・・・俺はなんてバカなんだ、こんな大事なことを忘れるなんて・・・」

英の顔は恐怖で歪んでいた。

和人は英が何を言っているのか理解できなかったが、桑田の手首のおびただしい出血と蒼白な顔を見て鳥肌が立った。

（これは1分1秒を争う時間との戦いだ！早く救急車を呼ばないと、桑田は死ぬ！・・・そうだ！）

和人は目を大きく見開き、体育館の外に向かって走りだした。

外に出ると、あたりを見渡し、身を隠す場所を探す。

そしてプールとボイラー室の間のわずかな隙間を見つけ潜り込むと、携帯電話を靴から出した。

和人はすぐにSTOPボタンを長押し。

白い光とともに「Time must stop!」の文字が浮かぶ。

――時が止まった。

和人はふうっと一息ついた。

「よし。とりあえず民家があるところまで行ってみよう。」

和人は声に出し歩き始めた。

10分ほど歩くと、先の方に松永の姿が見えた。

「さすがだな、もうこんな遠くまで来ていたか。でもまだ民家まで5分はかかる。」

やがてその松永に追いつき追い越した。

松永の顔は苦しそうだっ

きつと全速力で走ってきたのだろう。

「こんな時に限って車が一台も通らないなんてな・・・」

和人は静止している松永に語りかけた。

さらに和人は歩き続けた。
ずっと遠くに家の屋根が見える。

「あと少しだ。あと少しで電話ができる。」

和人はさらに歩を速めた。

そしてとうとう一軒の民家についた。

「さて、このうちの人、いてくれよ。」

言いながら和人はドアノブに手をかけた。

ガッ。

回らない。

カギが閉まっているのだ。

留守の家に上がりこんで電話をするのはさすがに無理がある。

下手すれば留置所行きだ。

「仕方ない、次の家をさがそう。」

和人は、先へ進んだ。

「あった、家だ。しかもおじさんが庭の植木にホースで水をまいて
いる。・・・よし。」

和人は周りを見渡し、そのおじさん以外に誰もいないことを確かめ
ると、おじさんの後方へ回り「STOP」ボタンを押した。

「すみません、おじさん！友達が怪我しているんです。電話を貸
して下さい。」

和人がおじさんの後ろから叫ぶと、そのおじさんはびっくりしてホ
ースを放り投げた。

「おわっ！な、なんで後ろにいるんだよ。びっくりするじゃないか
！」

「すみません話は後です。とにかく電話を貸して下さい。」

和人の必死の訴えに、おじさんがたじろいだ。

「わ、わかった。玄関の電話を使い。」

おじさんがそう言った時には和人はもう玄関を開けていた。
119番をダイヤルする。

ガチャッ。

「はい消防署です。火事ですか、救急ですか？」

「救急車を、すぐに緑丘中の第2体育館へお願いします！」

「第2体育館と言えば、以前に市民体育館だったところだね。」

「はい、そうです。出血がひどいんです。すぐをお願いします。」

「大丈夫です、救急車は今出発しました。けがしたのは誰ですか？どこをけがしたんですか？」

「中学生です。部活中に手首の動脈のところを切ってしまったんです。」

「君の名前は？」

「たち・・・、すみません急ぐので切ります。」

ガチャッ。

和人はふうつとため息をついた。

（あせった。あやうく自分の名前を言いそうになった。それにしても早く来てくれよ救急車。）

玄関の前におじさんが立っていた。

「第2体育館から走ってきたのか？大変だったね、どれ、おじさんが車で送ってやろう。」

「いえ、いいんです。電話を貸していただいただけで。ありがとうございます。」

「あ、君。」

おじさんが止めるのも聞かず、和人は飛び出していた。

そして、周りに誰もいないことを確かめると、もう一度「STOP」ボタンを長押しした。

第36話

「さあ、やれるだけのことはやった。後は桑田、お前が頑張るしかない……。頑張れ桑田。絶対に死ぬなよ！」

和人はもと来た道を引き返しはじめると、途中でまた松永とすれ違った。

松永は、留守の家のドアの前にいた。

ドアの前で口を大きくあけ、げんこつを振り上げている。顔中に汗が流れ必死の形相だ。

「松永、残念だけどこの家は留守だ。それにしても、よくがんばったな。桑田が助かったらアイスでもおごってやるからな。」

そういうと和人はその場を離れ、先を急いだ。急いであるものでもなかったが、和人は桑田の状態が気になって仕方がなかったのだ。

体育館に着き、桑田のそばへ来て見ると、英が桑田の左手首をハンカチで押さえていた。

桑田は仰向けの状態で、積み上げられたバッグの上に足を乗せている。

表情は――目をつむり眉間にしわを寄せていた。

「よし、まだ意識はあるみたいだ。でもいったいなぜ手首をけがしたんだ？」

和人はゆっくりと桑田の周りを見回した。

桑田の血しぶきが広い範囲で床に散らばっている。この血をたどるとすぐに原因がわかった。

桑田が倒れている場所から10メートルほど先に窓があり、窓を保護するために鉄の格子がついている。

その格子の左下の角の部分を止めるためのビスがかなり緩み、壁と格子の間に2センチほどの隙間ができていた。

「これか。この隙間に桑田の手が入りこんで、角の部分が手首を切り裂いたんだ。」

そう納得した和人は、体育館を出て、プールとボイラー室の間のわずかな隙間に入った。

そして、――時が動き出した。

和人が体育館に入ると、すぐに英と目が合った。

「和人、まだ救急車に連絡は取れないか!？」

「・・・近くを走りまわったけど、車も誰も通らない。でも松永が民家がある方へ走っていったから、もうそろそろ連絡が取れるんじゃないかな・・・。」

「そうか。」

「それにしても楠田先生は何をしているんだろう。」

「松永先輩に今日は遅くなるからって伝えたそうです。」

一年生の部員が和人の問いに答えた。

「たぶん臨時の職員会議か何かだ。・・・学校へは誰か連絡に行っただか？」

「はい、川本と戸高が行きました。」

「よし。」

英の目はその一年生部員をちらっと見た後、桑田の手首へ移った。

鋭い眼光。

歯を食いしばり、どんな小さな変化も見逃さないだろうと思えるほど集中している。

ピーポーピーポー・・・。

遠くから救急車のサイレン音が聞こえてきた。

英と和人が目を合わす。

「桑田聞こえるか? 救急車が来たぞ。もう少しの辛抱だ。」

英が声を張り上げた。

答えるように桑田が小さく首を縦に振った。

体育館の前に救急車が到着し、すぐに担架が運び込まれた。

そして3名の救急隊員が手際よく桑田を担架に乗せ、救急車へ運び入れた。

「桑田は・・・、桑田は助かりますか？」

英が絞り出すような声で救急隊員に聞いた。

「さあ、それはわからん、医者じゃないからな。先生は？誰か大人はいないのか？」

「いません。先生は遅れてくると言っていました。」

「そうか、じゃあキャプテンは？」

「松永ですが、今ここにはいません。」

「じゃあ、君が病院まで同行してくれるかい？」

「はい。」

「僕もいいですか？」

和人が聞いた。

「もちろんだ。さあ行こう。」

救急隊員は英と和人を救急車に乗せ後部のドアを閉めた。

第37話

「止血をしたのは君たちかい？」

桑田の腕をゴムチューブできつく縛っている救急隊員が英と和人に話しかけた。

「英がしました。」

和人が英を指さした。

「タオルではきつく締めるのは難しいんだ。このゴムチューブなら簡単だけどね。でも、よく縛っている。しかも足をあげて頭を低くしていた。応急処置は上等だ。・・・誰かに訓練を受けたのかい？」

「保健体育で習ったことがあるような気がします。」

「そうか、でも実践できるなんてすごいぞ。救急隊員になったらどうだ。」

「はあ。」

英が少し照れたような表情をしたが、すぐに言葉をつづけた。

「桑田は大丈夫でしょうか？」

「意識はしっかりしている。病院に着くのがよほど遅くならない限り、大丈夫だろう。」

救急隊員がほほ笑んだ。

「本当ですか？」

和人と英が同時に言った。

「それもこれも君たちのおかげだ、感謝状ものだぞ。」

助手席に座っている隊員が振り向きながら言った。

救急車は滝川病院に到着した。

第2体育館を出発してから5分ちよっとなしか経っていない。

普通の車で法定速度を守りながら走ると10分はかかるのだが、救急車はさすがに早かった。

桑田はすぐに手術室に運ばれた。

英と和人も手術室の前に行こうとしたが、救急隊員に呼び止められた。

「患者さんのこととかいろいろと教えてくれないか。調書に書かなきゃならないからね。」

二人は聞かれるままに質問に答えた。

「いろいろありがとう。これで大体のことはわかったよ。ただ、患者さんの電話番号と通報者だけが不明なんだよな。誰が119番したのか君たち知らないかい？」

「たぶん松永じゃないですか。真先に民家に走って行ったから。」
和人が答えた。

「木へんの松に永久の永で松永君だね。下の名前は？」

「秀樹。優秀の秀に樹木の樹です。」

「そうか、じゃあ後は患者さんの電話番号だけだな。」

「それは・・・。」

その時顧問の楠田が走ってくるのが見えた。

「今先生が来ました。先生なら分かるかもしれません。」

「そうか、じゃあ先生に聞くとしよう。」

そこへ楠田がやってきた。

額から汗が噴き出している。

「橘、桑田はどこだ？」

「今手術室に入っています。」

「で、どうなんだ、容体は？」

「たぶん大丈夫じゃないかって、この人が・・・。」

楠田は救急隊員の方を見た。

「どうもすみませんでした、監督不行き届きで……。桑田は・・・、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「確証はありませんが、まだ意識がありましたので、大丈夫ではないかと思います。」

「はあ、よかった！」

楠田はへなへなとその場に座り込んだ。

肩で息をしている。

「まだ安心はできませんよ、あくまでも私がそう思っただけです。ところで先生、この二人の生徒さんにいろいろと話を伺ったんですが、患者さんの電話番号がわからないんですよ。」

「それは、学校へ電話すればすぐにわかると思います。教頭先生がいましたから。」

楠田が携帯電話で学校に電話をし始めるのを見て、和人と英は、手術室の方へ向った。

第38話

「そうか、ここは和人の母さんが亡くなった病院だったな。」
まったく迷いなく手術室へ向う和人を見て、英が言った。

「うん……。」

「あの時は病院に来れなくてすまなかった。」

「いいんだ。対抗戦も控えてたし……。」

二人は手術室の前に着いた。

ほかの人はまだ誰も来ていない。

二人はソファーに並んで座った。

「でもあの時、……ほら葬式の後にさ、英が俺に『ごめん』て言
ったよな。」

「そうだったかな？」

「とぼけるなよ、確かに言った。」

「ふーん、なんで謝ったわけ？……そうだ、ほら、今言ったこと
だよ。病院に駆け付けられなかったことさ。突然なに思い出してるん
だよ。」

「……ずっと気にしてなかったけど、今日のこと思い出したん
だ。」

「今日のこと？」

「ああ、松永に桑田のことを聞いた時、お前変なことを言ったよな
？」

「えっ？」

「確か、『何でこんな大事なことを忘れてたんだ。』って。」

「……そうかな？よく思い出せない。」

英は明らかに動揺していた。

視線があっちに行ったりこっちに来たり、できるだけ和人と眼を合
わせないようにしているようだ。

「わかってたんじゃないのか？俺のお母さんが死ぬことも、桑田が

大怪我することも。」

和人が英の眼を見つめて小さな声で聞いた。

「そう言えば、俺のお母さんが死ぬ何日か前に、部活の居残り練習を手伝おうとしたら、お母さんが具合悪そうだから早く帰れって言ったこともあったな。」

「ばかなこと言うなよ。頭おかしくなったんじゃないのか？・・・やれやれ受験勉強のしすぎだな。」

英がソファから立ち上がりかけたその時、廊下を駈けてくる足音が聞こえた。

桑田の母親だった。

和人は桑田の母親の顔を知らなかったが、その人の表情を見たとき、桑田の母親だと確信した。

「純一はこの中にいるの？」

桑田の母親は英に聞いた。

「はい。」

「どんな様子だった？血がいっぱい流れていたの？息はしてた？」

「気は失っていませんでした。救急隊員の人がつぶん大丈夫だろうって言ってました。」

「そう・・・、そうなの・・・。」

桑田の母親はふうっと息をつき、ドスンとソファに座った。

そして洋服の袖で額の汗を拭きはじめた。

ハンドバックもハンカチも、何も持ってきていないようだ。

ただ、財布だけ右手につかんでいた。

「ごめんなさいね、とり乱しちゃって。君たちは確かサッカー部の先輩ね。」

「はい、僕が園山といって、こっちが橘です。僕たちも救急車に乗って来ました。」

「ありがとう。純一をみていてくれたのね。まあ、こんなに血が付いているわ。制服はこれでクリーニングしてちょうだい。」

英の制服の上着にはたくさんの血が付いていた。

黒の学生服で遠くからは血の付着に気付きにくいだが、近くで見るとはつきりとわかる。

桑田の母は財布から5千円札を出し、英に渡そうとした。

「いえ、そんな、大丈夫です。」

「ううん、これは受け取ってもらわないと困るわ。でももしかしたら買い替えないといけないかもしれないわね。その時は弁償させてもらうから。」

桑田の母は、英の手に5千円札をつかませた。

「それにしてもびっくりしたわ。松永くんから電話をもらった時はあわてちゃって、ほら、このスリッパ右と左が違うでしょう。財布だけつかんでタクシーに飛び乗ってきたわ。」

確かに桑田の母のスリッパは、左右どちらも黒色だったが、あきらかに形が違っていた。

その後続々と人が集まってきた。

楠田、桑田の父親、兄弟、祖父母、学級担任、サッカー部員、クラスメイトなど、わずか30分の間にその数は50名を超えていた。

やがて、医師と看護婦が出てきた。

医師は、桑田の家族に手術が成功し、輸血と点滴を続ければ翌日には歩けるだろうということと、今のところ桑田は眠っているので、家族以外は病室に入ることができないということを告げた。

和人と英は、桑田に会うことなく楠田の車に乗せられ、帰宅した。

第39話

翌日の学校は、桑田のけがの話題でもちきりだった。

和人はクラスの皆から質問攻めにあい、なかなか勉強に身が入らない。

「なあ、もう俺が知っていることは全部話したよ。いい加減に勉強しようぜ。受験は明後日なんだから。」

「そうは言ってもなあ、受験生にはショッキングすぎるぜ。・・・血って手首からどんなふうに流れたんだ？」

おしゃべり好きの北島の質問は止まらない。

そこへ、2年の松永が廊下を通りかかった。

「おつ、ちょうどいいところに松永が来た。俺なんかより松永の方がずっと詳しいぞ。なんて言ったってけがをする瞬間を見たんだから。」

「けがする瞬間は見えてませんよ。叫び声のする方を見たら桑田の手から血が噴き出していたんですから。」

松永の発言で、クラス中の目が松永に集まった。

「松永君、それからどうなったんだ？」

案の定、北島が飛びついた。

「え、えーと・・・、僕は一刻も早く救急車を呼ばなくちゃと思って、携帯を持っている人を探しに外へ出たもんで、そこから先はわかりません。」

「わからない!？」

「はい、残念ながら。」

「それだけ?それじゃあ救急車に乗った和人の方が、まだましじゃないか。」

「そういうことになります。」

「なあんだ、つまんねえの。それで・・・松永君はすぐに救急車を呼べたの?」

「それが・・・、人が住んでいる家の方へ走って行ったんです。その途中で携帯を持っている人に会えばいいし、会わなければ民家の電話を借りようと思って。でも、誰にも会わないし、民家に着いた時にはちょうど救急車のサイレンが聞こえてきました。」

「え？でも民家まではかなり遠いだろう？」

「10分以上全力で走りました。」

「で、自分より先に誰かが救急車を呼んだわけだ。」

「はい。」

「ぷっ！と、ごめんごめん。でもそれおもしろすぎるぞ、はっはっは。」

「・・・。」

見るに見かねて、和人が口をはさんだ。

「おい笑うなよ、松永は必死に走ったんだ。桑田が死ぬかもしれないと思って。・・・悪かったな松永、もう行っていいぞ。」

「はい。でも僕、橘さんに聞きたいことがあって来たんです。」

「聞きたいこと？」

「はい。救急車を呼んだのが誰か知りませんか？」

和人は少しどきっとした。

「残念ながら知らないな。救急隊員の人も知らないみたいだった。おそらく携帯を持っている人が体育館の近くを通りかかったんだろうな。」

「それが、携帯からじゃなかったんです。」

「えっ？」

「昨日救急隊員の人から僕の家に電話があったんです。楠田先生から電話番号を聞いたって言って。で、その人の話だと、その時の電話は池田さんという家からかけられたそうです。」

「池田さん？」

「僕が走って行った先の家です。正確には2件目の家だったんですが、1件目は留守だったんで。」

「その池田さんが救急車を呼んだと？」

「いえ、それが・・・中学生が池田さんの家にやってきて、電話を借りに来たらしいんです。」

「それってお前のことだろ？」

「だから、僕がその家に着いた時にはすでに救急車のサイレンが鳴っていたんですって。」

「わけわかんねえな。お前、桑田が怪我したとき真っ先に飛び出したんだろ？」

「そうです。」

「しかも民家までは一本道。」

「そうです。」

「足の速いお前が全力で走って抜かれるわけないしな。・・・わかった、お前途中で立ちションしただろ、立ちション。その時に抜かれたんだよ。」

「立ちションなんてしてませんよ。」

「じゃあ、どういうことだ？」

「わかりません。何が何だかさっぱり・・・。」

すると、このやりとりをじっと聞いていた北島がニヤニヤしながら口を開いた。

「ミステリーだ！こりゃあおもしろくなってきたぞ。」

北島は歩きながら熱弁をふるいだした。

「俺が推測するに、その電話を借りに来たという中学生は、恐らく幽霊だな。しかもとってもやさしい幽霊だ。たぶんその幽霊は女で、第2体育館に彷徨っていたんだ。そしてサッカーをする桑田少年に恋をした。きっとそうだ、その中学生は女だったんだろ、松永君。」

「松永はもう行ったよ。」

和人がぶっきらぼうに答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3831w/>

TIME

2011年10月27日11時15分発行